

回想の戦中平良（＝宮古）のまちと周縁

「疎開・教育・暮らしの周辺……」

仲宗根 將一（宮古島市総合博物館協議会委員）

はじめに

古琉球期、宮古は「ミヤーク」あるいは「ウプミヤーク」と称し、琉球王府の辞令書では「大宮古間切」とも明記されている。のちに平良間切、さらに下地間切、砂川間切の順で創設されて三間切となる。間切は村々で構成されており、近世末期から近代初期には三八か村。一九〇八（明治四十一年）四月、特別町村制の施行で、平良・城辺・下地・伊良部の四村に再編され、従来の村や五つの添は字と読み変えられた。四三字である。

平良村は多良間三か字を含めて十八字、城辺村は九字、下地村も九字、伊良部村は七字で、一九一三（大正二年）四月、多良間三字は分離・独立し、一九二四年二月には平良村は町制を施行している。

かつて「自立」していたであろう宮古は、琉球王府と朝貢関係を持つようになって漲水港に面して、統治機関として「蔵元」が設置され、薩摩藩支配下の近世には王府から在番役人・医師・僧侶・講解師・検使らが派遣されて、役人の集住する首邑は「ピ

サラ」、あるいは「ピサラ五箇」と称されるようになった。西里・下里・東仲宗根・西仲宗根・荷川取の五か村（字）を指し、廃藩置県後は各官衙が集中、開設されて官庁街を形成した。さらに市場・西里・下里三通りを中心に商店街、公設市場、料亭街が形成されて、自他ともに那覇に次ぐ県下第二の都市と称されるようになった。

西里・下里両字郊外の農村地域は、「最寄」とよばれ、ピサラの生鮮食料品の供給地を形成していった。しかし「アジア・太平洋戦争」で最寄の七原・屋原・越地の三集落一帯は、一九四三（昭和十八）年九月、強制退去させられて、海軍飛行場が設営されている。現宮古空港の前身である。さらに翌一九四四年には下地村に二つの陸軍飛行場が設営されて、宮古全域が軍事基地化され、およそ三万余の軍隊が布陣した。代つて老幼婦女子およそ一万人が九州や台湾に疎開させられている。戦火は激しく宮古も戦場必至の情勢であった。残る人口はおよそ五万二〇〇〇人。

この時期、平良の市街地には、尋常高等小学校は、平良第一、平良第二（現・北小）の二校、最寄りには鏡原小、宮古全域では十七校あって、一九四一（昭和十六）年四月、学制改革で全国一斉に国民学校に改称されている。中等学校は県立宮古中学校と宮古高等女学校の二校、どちらも昭和初期、宮古挙げての

誘致運動にもとづく創立である。両校は戦後統合して男女共学の宮古高等学校となっている。

本稿は、国民学校最初の一年生として、以前にもまして「皇民教育」―軍国主義・超国家主義―を徹底され、さらに敗戦による学制改革で義務教育として発足した新制中学の最初の一年生として、「平和憲法」を最初に学んだ世代の、自分史と地域史を一つにした記録である。その時々々の世相に宮古の歴史や風土等を関連させての新聞等への寄稿のため、体系性には欠け少ない重複もあるが、その時々々の真情の反映でもあり、あえてそのままにした。繁雑さはお許し願いたい。また、大まかではあるが、疎開、教育、暮らしの周辺、「自立」した宮古、の四つに分類したために、順不同になっていることも了承を得たい。執筆の時期は、もともと古いので一九八五年、以後数点を除いて、大方は宮古ペンクラブ発足の二〇〇三年以降である。

第一部 疎開

1、国民学校五年生の原体験

漲水港から上陸用舟艇に乗せられ、沖合に碇泊している疎開船に乗りこんだのは、一九四四（昭和十九）年八月二十六日で

あつたと記憶している。

直接戦場になるかもしれない宮古で、少なくとも戦闘に役立つたない女、子どもと年寄りばかりの疎開船であつた。疎開船といつても客船ではない。大型輸送船をにわか仕立ての客船にしたのであろう。客室は船倉を二段に仕切つただけ。ちよつと大きな子は背を伸ばすと頭がつかえてしまう。明かりも換気もない。軍馬も輸送していたのか、馬のにおい、小便のにおいもまじり、吐き気をもよおす悪臭がたちこめている。便所は甲板の舷側沿いに鉋^{カンナ}なしの柱と壁板だけ、天井のない急ごしらえのが幾つか並んでいるだけ。用を足すとそのまま海中にドボンと落ちるのが見えないのがせめてもの取り柄と思つた。乗船とともに多くの人が船酔い、ゲロを吐く人がでる。

乗船翌日の夕方には、幾隻ものサバニが家族見舞いの人びとを満載してやってきた。ふかしたてのサツマ芋やサタ・パンピンなど、差し入れ持参の家族見舞いである。見上げるばかりの高いデッキから垂れる縄ばしごで上下するのである。時には空中ブランコのようにゆれる。今にも海中深く振り落されそうな錯覚にとらわれる。

そのような危険を防ぐためであろうか、それともほかにもっと重要な意味があつたのだろうか。その翌日には平良の沖合はるか、池間近くに移動した。それでも何組かの人がなおサバニを漕いできたのだから、家族のきずなどは筆舌に尽し難いもの

がある。

数日後、船はどれも鳴らさず、静かに那覇へ向けて出発した。これで宮古とは完全にお別れとなる。

那覇では全員手荷物だけで上陸、およそ一週間遠出禁止のま指定の旅館に泊まらされる。本島組との合流、それに米軍機や米潜水艦の攻撃を避けての待機だという。出港日時も明かにされない。スパイに探知されなかったためだというのである。

ある日突然の指示で急拠乗船、出港となったが、その日のうちに本島北部海岸近くに投錨、さらに約一週間近くも待機となる。船上から民家や人影はまったく見えないが、全面ソテツの自生地らしい光景である。

数隻の疎開船団に何隻かの護衛艦が付いて出発したその夜、退避状態での仮眠を指示される。七島灘とおぼしきところで大嵐に遭遇、船は大ゆれにゆれる。船酔いの人が一気にふえる。突如、真暗闇のなか、敵潜水艦発見、全員救命胴衣をつけて甲板に出る、という指示が飛ぶ。探照灯の光に潜水艦が見えたと叫ぶ声もする。

一睡もせず、恐怖の一夜が明けた。屋久島が見えた、もう安心だ、という声がある。

九月二十一日午後、船はサツマ富士を左手に、波静かな錦江湾に入っていく。翌二十二日午後下船までの一夜の長かったこと、それ以前の二旬余に匹敵すると思っただから、不思議なものである。鹿児島市ではさらに一週間旅館泊まりとなる。

ここで鹿児島に残る組と宮崎その他へ向かう組と別れることになった。こうして生まれて初めての汽車に乗り、叔母の実家のある加治木へ向かった。飢えと寒さと霜焼けの始まりである。

明けて一九四五（昭和二十）年「沖繩戦」の激化にともなって、鹿児島も連夜空襲にさらされるようになる。夜ごと国鉄線路沿いのまちが順次焼失していく。

八月初め、さらに熊本県境近くの栗野に疎開した数日後、加治木のまちも留守宅もろとも全焼した。八月十一日である。それからわずかに四日後、日本は敗戦した。

あれから四十一年、すべての原点はこの疎開にまつわる一年間にある、と今なお痛感している。国民学校初等科五年生の原体験である。

『日刊宮古』一九八六・八・十五

2、アニメ映画「かんからさんしん」

一九四四（昭和十九）年八月下旬、池間島近くに碇泊した一隻の大型輸送船がいた。戦場化必至の宮古を避けて、南九州へ向う疎開船であった。超満員の疎開船は一週間後、夜陰に乗じて那覇へ向かった。

制海権も制空権もすっかり米軍の手中に落ちた三百余キロの大海原の航海に、大人たちは内心の動揺を抑えるのに必死であ

つたろう。大半ははじめて旅立つ子づれの女性たち。そう多くもない男性の大半は年寄りであった。一人、二人と数えるほどの壮年は引率者であり、一行を疎開先へ送り届ければ、戦場と化すかもしれない宮古へ再び帰って行かねばならない任務を負っていた。そのせいか、いつも怒りっぽくピリピリしていた。子どもたちばかりは、大人の心配をよそに広い船内を駆けまわっていた。

ぶじ那覇へたどりついた一行は、わずかばかりの身のまわりの荷物だけで、いくつかの旅館に分宿させられた。米軍の動向と天候をみはからって出港するため、出発の日取りは直前に指示される。よってつねに連絡の届くところに居ることが要求され、遠出は禁止された。那覇に知友のいない大方の疎開者は、犬が鎖の長さを半径にぐるぐるまわっているように、いつも旅館とその周辺の道路で終日を過ごしていた。軽便鉄道を生まれてはじめて眼のあたりにしたのも、このときである。

ほぼ一週間後、突然乗船命令がでた。お母さんたちは乳飲み児を背負い幼な子の手を引くようにして、港にかけつけ乗船する。人力車で用足しに出ている引率者の一人は途中港へ急ぐ一行に出会って、あわてて宿に戻り出港寸前に乗船する姿もみられた。乗り遅れた疎開者はいなかったろうか。

数隻の疎開船団は幾隻かの駆逐艦等に護衛されながら、出発したと思ったのに、一夜明け眼ざめてみたら、船はソテツの群生する陸地近くに碇泊している。本部半島だという。そこでま

たほぼ一週間、蒸し風呂のような船上生活がつづく。宮古の家を出て早や三週間余、風呂にも入らず、着たきり雀であった。

おまけにもともとが輸送船、乗客用の便所はない。甲板上に急ごしらえの屋根なし便所が幾つか並び、海に落ちそこねた糞尿が船のローリングで甲板を汚し、悪臭が広がる。

激しい風雨のなか、鹿児島へ向けて出港したその夜、米潜水艦に襲撃された。暗闇のなかで船酔いに苦しみながら、救命胴衣をつけ、護衛艦から発射される爆雷(?)の轟音におびえながら、一夜を明かす。

九月下旬、鹿児島へ上陸した。分宿した旅館に宮古出身の青年がたずねてきた。一足さきに宮古を発ち、米潜水艦に撃沈されて幾日か海上をただよい、救助されたという。学童疎開船対馬丸が同様運命にあって、数百名の学童が海の藻屑と消えたと聞いたのもそのときであったろうか。

守ってくれるはずの友軍の銃にも脅えた「沖縄戦」の悲劇は、勿論こんな生やさしいものではなかったろう。「沖縄戦」を描くアニメ映画「かんからさんしん」の制作がはじまっている。あの言語を絶する激戦のなか、人びとが「いかに死んだか」ではなく、「いかに生きたか」を、沖縄の伝統文化「かんからさんしん」に据えて、描いているという。

かつての激戦地、そして今は極東最大の米軍基地のある沖縄から、「対馬丸」につづいて送られる平和のメッセージ「かんからさんしん」制作に、一人でも多くの協力が求められている。

六月「沖縄戦」終結のころ、全国一斉に封切られる予定。市(郡)民多数の、制作・上映へのご協力をお願いする次第である。

「かんからさんしん」の成功をめざして、三月二十二日にはアニメ「対馬丸」の再上映も準備されている。多くの市(郡)民がご家族そろって鑑賞されますよう、よびかけるものである。

『日刊宮古』一九八九・三・二〇

3、「対馬丸記念館」

制服はなかったが上着の左胸ポケットの位置には、名刺のようない生地の名札を縫いつけていた。氏名のほか現住所と学校名、学年、組まで墨で明記されている。敵(米英軍)の空襲で爆死もしくは行き倒れになったとき、身許がわかるようにである。教室に入り席につくときは、そのつど教壇背後の壁に掲示されている伊勢の皇大神宮(天皇の祖先神を祀る神社)の

「大麻たいま(神符)」に最敬礼を義務づけられていた。うっかりそのまま着席しようものなら、何処で見ているのか男女を問わずピンタを張られた。国民学校初等科三年生のころの記憶である。

一九四一(昭和十六)年四月、学制改革で平良第一尋常高等小学校は平良第一国民学校(略称・平一校)と改称された。最初の一年生である。既に教室には「大麻」は掲示されていたは

ずだが、記憶ははっきりしない。三年生からは鮮明である。教室の掃除当番も一、二年生は除外され、三年生から始まった。

三年生以上、高等科二年生まで、町内会(農村は部落会)単位で男女別に班が編制され、一週間ごとに全教室を移動してお昼休み一斉に清掃するのが日課であった。そのさいも教室の出入りにはつねに「大麻」への最敬礼は義務づけられていた。

国民学校は「皇民」としての少国民錬成の場であり、教科書もすべて国定であった。音楽も「ドレミファ…」ではなく、「ハニホヘトイロハ」で教わった。のちに知ったことだが、敵の飛行機の爆音を聞きわけけるための基礎をなす教育(訓練)であった。「一旦緩急アレバ…」(いざ、という時には…)天皇のために命を捨てることを最高の名誉とする「教育勅語」も暗記させられた。

翌一九四四(昭和十九)年、四年生の夏、宮古には三万余の陸海軍が展開した。平一校は隣接の県立宮古高等女学校とともに師団司令部が設置された。前後して九州への学童疎開の呼びかけが始まった。宮古は戦場になるかも知れないから、安全な所で教育をつづけるのだという。受験を控えた二歳上の兄のみ行かせよとの話しが急転して兄弟二人となり、さらに学童疎開が宮崎なら叔母の出身地への縁故疎開がよい、ということまで鹿兒島に変わった。

八月二十六日、急ごしらえで疎開船に仕立てられた大型輸送船に乗船した。池間島沖合でほぼ一週間碇泊したのち、那覇へ

向かった。那覇でもほぼ一週間、旅館に分宿したが、ある日突然の指示で乗船、数隻の船団を組んで出港した。沖縄本島在の国民学校の多くの学童疎開団も同乗していたが、本部半島沖合でまたもほぼ一週間の碇泊である。九州間の制空権も制海権も既に米英軍の手中にあつて、疎開船団の航海を敵のスパイに探知されないための待機だという。

出港したその夜、激しい嵐の中、七島灘にさしかかったとき、全員救命胴衣を着けて甲板に集められた。敵潜水艦の襲撃である。幸い魚雷は当たらず、九月二十一日午後、船団は無事鹿児島湾に入った。

城山近くの鹿児島島の旅館でもほぼ一週間宿泊したのち、それぞれの疎開先に向かった。旅館滞在中、宮古出身の第七高等学校造士館（現鹿児島大学）在学中の二人の学生がたずねてきたが、二人とは別に十七、八歳の戦闘帽姿の若ものもたずねてきた。少年航空兵の合格通知を受けて入校するため宮古を発つてきたが、那覇から鹿児島へ向かう途中、米潜水艦の魚雷で汽船は轟沈、幾日も漂流した末、救助されたという。学童七七五人を含む一四一人が犠牲になった対馬丸であったのである。

転校先の国民学校の正門右脇にはコンクリート造りの立派な「奉安殿」があつて、登下校には空腹と霜焼け、寒さに震えながら最敬礼させられる「軍国少年」の明け暮れであつた。あれから満六十年、八月二十二日「対馬丸記念館」の開館で、思い新たなものがある。

4、地域を知って始めて・・・

二番目の娘が受験を話題にしていたころであつた。戦時疎開に引きつづいて青年期に入る一時期過こした南九州のとある街に連れて行ったことがある。かつての通学路の周辺をぶらり散策したところ、娘が言うのである。「とてもこれでは初めから勝負にならない。まるでそこら中に教科書があるようなものだ」と。何を言い出すのだ、といぶかしく思つたのはほんの一瞬のこと、ほどなく成るほどとうなずいていた。

中学・高校の日本史の時間に、明治維新の三傑―薩摩の西郷隆盛と大久保利通、長州の木戸孝允（桂小五郎）―について教わったことがある。娘と歩く川べりの遊歩道に沿って設けられた緑地帯には、西郷隆盛・従道兄弟の誕生地、大久保利通の居住地跡を示す頌徳碑しよとくへいが建立されている。さらに行くくと西郷とともに西南戦争を戦った村田新八、篠原国幹、池上四郎・・・、それに日露戦争で名を馳せた東郷平八郎、大山巖、黒木為禎、山本権兵衛・・・ら。軍人ばかりではない。

台湾や南洋群島の動植物、民俗調査をおこない、日本における熱帯植物研究の先駆者として知られ、沖縄にもゆかりの深い

田代安定、近代日本の洋画界を代表するひとり和田英作らの誕生地を示す顕彰碑もある。さらに駅前広場には維新前夜、密航同然に渡欧した十九人の「若き群像」の銅像もある。帰国後、初代文部大臣となった森有礼、初代帝室博物館長・町田久成、東京開成学校（のちの東京大学）の初代学長・畠山義成らもこの中にいる。

まるで近代日本の歴史の中を浮遊しているようである。もつとも「沖繩戦」で、「最後迄敢闘し悠久の大義に生くべし」などと言って、一般県民を戦場に放置したまま、さっさと自決した沖繩守備軍の司令官牛島満の碑には鼻白む思いであった。

地域には地域社会を形成した多くの有名無名の先人がいる。地域史の集成こそが県、国、世界史を形成しているといえよう。若い世代に如何に地域の先人の歩みを伝えるか、受験とは関係ないところで、娘の一言を反芻していた。地域を知ってはじめて日本、世界が見えてくるのではなからうか、と。

『宮古毎日新聞』二〇〇六・一一・一五

5、宮古の「一〇・一〇空襲」

十月十日は、所謂「一〇・一〇空襲」から満六〇年である。

太平洋戦争末期の一九四四（昭和十九）年十月十日、米国第五

十八機動部隊から艦載機延べ一三九六機が奄美、沖繩、宮古、八重山、大東の各諸島を爆撃した。明けて三月～六月、三月余にわたる一般県民を巻き込んだ地上戦「沖繩戦」の前哨戦といわれる米軍の沖繩初空襲である。この日一日の空襲で那覇市の九〇%、一万一千余戸が焼失、軍民合わせて六六八人が犠牲となった。近年の調査では、石垣島の陸軍飛行場（白保）設営に動員された沖繩本島の人びとが、工事を終えて帰途についた輸送船がこの日、久米島沖で米軍のB二九爆撃機で撃沈、六〇〇余人が犠牲にあっているので、犠牲者の数は従来の二倍以上になるといふ『沖繩タイムズ』二〇〇四・九・二八。

宮古は午前七時三十分～八時十五分、延べ十六機の戦闘機がラムンが襲撃、主として飛行場と漲水港（現平良港）が襲われた。港では碇泊中の船舶が猛爆をあびている。さらに午後一時五分、第二波はバンコックから米を満載、台湾・キールンをへて大阪へ向かう途中漲水港へ碇泊していた輸送船広田丸を爆撃、撃沈している。二波にわたる爆撃で飛行場では駐機中の飛行機九機が撃破され、兵員十名が死傷した（瀬名波栄『先島群島作戦（宮古篇）』一九七五）。

一般に「一〇・一〇空襲」では、宮古は飛行場と港湾のみが爆撃されたように語られがちだが、この日、大神島では三人が即死、負傷十人、住家十三戸が焼失している『平良市史』第四卷「近代」編・一九七八。また、平良市の「平和の礎」刻銘のための調査資料には、下里で母子らしい二人、城辺町比嘉でも

爆風で五歳の子が犠牲にあつている『城辺町史』第二巻「戦争体験」編・一九九六。調査次第では他にも犠牲者を確認できるのではなからうか。各学校の「沿革誌」には次のような記録をみることができろ。

平良第二国民学校（現北小） 本日午前八時敵機来襲ノタメ即刻御真影ヲ御真影待避所ニ奉遷ス

鏡原国民学校（現鏡原小） 朝八時突如空襲警報発令直チニ敵機約十機来襲、飛行場其他ヲ約半時間爆撃ス。予メ作製セル防空壕ニ御真影ヲ職員ニテ急拠奉遷シテ奉護ス、約三十分爆撃シ敵機去リタルニツキ新七原部落内ノ家ヲ借受ケタル学校事務所内ニ仮奉安殿ヲ作り奉護ス。午後二時頃又敵機二十機程来襲ス。校長以下職員敵ノ機銃掃射ノ中ヲクグリ、ヤット防空壕ニ辿リツキ、晚迄防空壕ニ奉護シ、夜分ハ学校事務所ニ宿直員二人宛置キテ奉護ス

西辺国民学校（現西辺小） 午前七時十分空襲警報発令、同七時二十五分第一回敵機来襲、御真影ヲ防空壕ニ御奉遷申上グ
下地国民学校（現下地小） 空襲、本日午前午後二回二亘リ敵機ノ空襲ヲ受ケタルモ本校ニ被害ナシ、敵機宮古島初見参ナリ

西城国民学校（現西城小） 空襲、本日午前七時二十分空襲警報発令敵米機グラマン機八機来襲 本郡最初の空襲ヲナス

北校舎ニ一ヶ所機関砲ニテ掃射ヲ受ク 裏ノ松林二五、六個落ツ 勅語及詔書謄本ニ異常ナシ

城辺国民学校（現城辺小） 今朝七時頃敵機波状的に来襲 畏くも御真影は職員一同にて防空壕に奉遷し警護し奉る 校舎並学区内異状なし直ちに県知事宛異状なきを報告す

伊良部国民学校（現伊良部小） 午前七時三十分空襲警報発令、午前八時、午後一時空襲あり、午後八時警報解除

県立宮古高等女学校（現宮古高校野球場） 空襲警報発令 敵機来襲

「一〇・一〇空襲」を記録した各「学校沿革誌」は共通して、児童生徒の安否や校区内の状況よりも天皇・皇后の写真である「御真影」の安全を重視していることが注目される。明治国家以来「教育勅語」とともに「皇民」教育の根幹をなす存在であったからであろう。軍事国家への道を支えたのが教育であることを痛感しつつ、イラク戦争と米軍ヘリ大学構内墜落、「平和憲法」改悪、下地島空港の軍事利用を叫ぶ人びとをからめて考える日々である。

『宮古毎日新聞』二〇〇四・一一・二〇

6、日夜猛爆におびえた日々

1、

一九九一（平成三）年一月十七日未明、米軍を中心とする多

国籍軍がイラクに大空爆を開始した。その夜のテレビ報道は一ヶ月近くへた今も脳裡に焼きついている。

爆撃機の発進、ミサイルによる破壊など、画面は生々しい爆撃状況を撮しながら、ニュース解説員と軍事評論家による戦闘の解説がつづく。ペルシャ湾の米海軍艦艇が実戦としては初めてトマホーク巡航ミサイルを発射した、第一次攻撃に使用された爆発力は広島に投下された原爆の一・五倍、一回のものとしては史上最大とも報じている。空爆は今後数日はつづくだろうとか、解説は戦闘予測まで始めている。一瞬我が眼、我が耳を疑ったものだ。

まるでテレビゲームではないか。画面は戦闘状況にのみしばらく、爆撃下の民衆がどうなっているかは、伝わってこない。

2、

あれは第二次大戦も早や終局近い初夏のことだった。所は南九州の小さな田舎街。

そのころ昼間街を歩く男性といえは、国民学校の児童（当時の言葉では少国民）と年寄りばかり。青壮年の大方が戦場に召集され、そうでないものも軍需工場か炭坑に動員されていた。中学生までが米軍の上陸に備えて、海岸線の防禦ライン構築に動員されていた。

官庁も国鉄の駅も職員は女性ばかり。国民学校も同様で、男性といえは校長と教頭くらい。それをカバーするかのようになり、師範学校在学中の十七、八歳の若ものが代用教員として、高学

年の授業を受けもっていた。授業とは名ばかり、実際はラジオから流れてくる大本営発表を中心とした皇軍の「赫赫たる戦果」と、いつ神風が吹くかといったような話ばかりであった。

県庁所在地の学校に戻っていたのだろうか、しばらくぶりに姿を見せたT先生は、いつもと違っていた。大人びて沈痛そのものだった。

「国鉄のトンネルの近くがB二九に爆撃された日の夕方、被災者の救援作業に動員されたんだ。たくさんの方が焼かれ、防空壕が直撃されたりで、死傷者、行方不明数知れず。これが戦争かという有様だね。そしたら一人のおばあさんが、一本の血だらけの腕を大事そうに抱いて泣いているんだ。爆撃で息子はこの腕だけになってしまった、と言ってるね。」

いつも騒がしい教室も、シンと静まり返ってしまった。しばらくは口を開くものもない。

直接地上戦を体験した沖縄県は、こんな比ではなかったろう。もとより広島、長崎も。

疎開先は当時人口二万足らずの小さな町であったが、八月十一日夜、米軍の空襲で市街地のあら方は全焼した。四日後、日本は「ポツダム宣言」を受諾、無条件降伏した。

3、

「日本国憲法」第九条は「日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、

永久にこれを放棄する。

②前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。」と明記している。

憲法は六年生の秋公布され、中学一年生のとき施行されて、正式に教科書で教わった。あれから四十余年、「空洞化される憲法」の声を聞いてからも久しい。朝鮮戦争、キューバ危機、ベトナム戦争、ニカラグア侵攻。そして今度は自衛隊機の中東派遣の動き…。県内には全国の七五%もの米軍基地がある。

4、

戦争を始めるのも人間なら、それを止めることのできるのも人間なのだ。テレビから流れるサイレンの音に、日夜米軍機の猛爆におびえた、かつての日々を重ね合わせながら反芻（はんすう）している。

『日刊宮古』一九九一・二・一八

7、「ぜいたくは敵だ」

今年も六・二三「慰霊の日」を中心に多くの学校等で、戦争と平和に関する資料展や特設授業が開かれている。新聞では、上野小、下地小、西辺小、城辺小、北中、城辺中、下地中などの授業模様が紹介されている。このほか報道はされていないが、

いくつかの小・中学校、高校でも開かれているようである。戦後六十年近くへてもなお戦争の悲惨さ、平和の尊さは語り尽くせないであろう。

一時間にわたって語ったあとには質疑の時間がある。なかには語らなかつた分野にまで質問が出て、問題意識の高さに驚かされることもある。今年は、小学生から「ぜいたくは敵だ」とは何ですか、と問われたし、中学生には「欲しがりません勝つまでは」のスローガンについて質問された。

さきの大戦中は現在とは違って統制経済で、衣・食・住など、人の暮らしに必要なあらゆる物資が、配給制であった。初めのうちはともかく、戦火が激しくなってくると、減配、遅配、欠配となり、配給と名ばかりで、次第になくなってしまふ。米がイモに変わり、家畜のエサであった大豆カス、フスマ（小麦のカス）になり、いつかそれさえもなくなる。シャツ等の肌着類はおろか、靴もなくなり、大人まではだしになる。自分で下駄や草履を造れない人は、多少とも余分に造った人にゆずってもらう。食糧も同様である。お金では売ってくれないので、先方の必要とする品物とこっそり交換してもらう。これは闇―非法行為であり、取り締まりの対象にされる。当時は経済も衛生も警察署の管轄で、発覚すればたちまち逮捕、留置場入りである。爆撃による死よりも飢えとマラリアによる犠牲者のほうが多い理由である。「補充兵われも飢えつつ餓死兵の骸焼むくろきし宮古しまよ

八月は地獄」(千葉県在住・高沢義人)、宮古駐屯元兵士の歌である。

それでも政府は、人としての最小限の保障もせず、「ぜいたくは敵だ」「欲しがりません 勝つまでは」などと精神主義を強調し、至る所に張り紙をして取り締まった。人の生存権まで合法的に奪ってしまう、これがかつて国民が好まずして強いられた戦争の姿である。

『宮古毎日新聞』二〇〇四・七・二三)

8、世界で一番偉い人は？

「十五年戦争」の末期、南九州のとある街に疎開した。国民学校初等科(現小学校)四年生の夏である。疎開先の学校は、江戸時代は藩の出城で、城内には藩士の子弟教育のための藩校があったという。明治に入って、広い敷地のほぼ真中から二つに区切って道を通し、右側は県立中学校(旧制)と護国神社、左側は国民学校と町役場、幼稚園、図書館が設けられていた。

国民学校の校門は、平城とはいえさすが藩主の居城跡、左右脇門付きの堂々たる石造建築物である。校門を入ると、右手(東方)に「御真影」(天皇・皇后の写真)を奉納した鉄筋コンクリートの奉安殿が設けられていた。登下校のつど奉安殿に最敬礼して通る。東へ向くので奉安殿はもとより、その背後はるか彼

方の「宮城」(皇居)も拝んでいたのである。

翌年八月、米軍の猛爆で学校はじめ街はすべて焦土と化した。それから四日後、戦争は日本の敗北で終わった。その年の冬であつたらうか。児童生徒の意向調査のようなものがあつた。いくつかの設問があつたが、一つだけ鮮明に記憶している。「世界で一番偉い人は誰れと思うか」である。焼け跡に兵舎を改造した寒い隙間風の吹く土間のバラック教室内はざわめき、ささやきが広がっていく。

日本占領の最高司令官マッカーサー元帥か、戦争に勝つたアメリカ合衆国のトルーマン大統領か……。

「ぜいたくは敵だ」「欲しがりません、勝つまでは」「大きくなつたら兵隊さんになります」などと、「教育勅語」を丸暗記させられ、出来なければ教壇横か、廊下に立たされる児童たちである。事の是非は二の次、どう答えれば罰されずにすむかが思考の焦点であつたのだが……。

週明けて校庭での全校朝会のさい、指揮台上に立った校長は烈火の如く怒った。「諸君はいつから三等国民になつたか。勝敗は時の運、戦争には敗けても大和民族は世界の一等国民に変わりはない。世界で一番偉いのは 恐れ多くも天皇陛下だ」と。

軍国主義・超国家主義によって、アジア諸国を侵略した反省の上に生まれた平和憲法であり、教育基本法であることを、日本国民たるもの片時も忘れるわけにはいかないであろう。

『宮古毎日新聞』二〇〇六・六・三)

9、「沖縄戦」の教訓

疎開先の南九州で、六・三制初の中学一年生になって間もないころでした。県の指導主事として学校を訪問されたK先生は、「国家の方針とはいえ、私は君たちに間違ったことを教えていた。取り返しのつかぬことであり、いまさら詫びてすむことではないが、許してもらいたい」旨のあいさつをされました。

K先生は敗戦の国民学校の五年生であった私たちの担任でしたが、徴用されたのが不在がちで、代わって若い師範学校生が担当していました。戦後間もなく学校に戻られてもしばらくは戦中の気風はぬけず、体育などでは焼け跡のほこりっぽく弾痕だらけの校庭で、「君たちのようなダラダラした少国民だから日本は戦争に敗けたのだ」と、激怒する場面もしばしばでした。おおかたの児童が栄養不良で、飢えと寒さにふるえています。先生の期待に応えられる体力などなかったのです。それでも怒号は容赦なくふりかかっていました。

そのK先生が戦災を免れた隣の小学校で間借りぐらしの、かつての教え子のクラスをたずね、教壇からさきのあいさつをされたのです。「教育勅語」を暗記していないといつて殴打し、「ジーン、スイゼイ……」と歴代天皇の名の暗記を要求していた先生の姿とは、まるで別人でした。なぜ、このように変わったのか、それを理解できるようになったのは「日本国憲法」や教育基本法の世界を知ってからです。以来ことあるごとにそのと

きの先生の苦渋にみちた表情を思いうかべ、ひいてはそこに至る先生の心情を考えるようになっていました。

一九六〇年代の壮大な祖国復帰運動に参加するなかで、家永三郎教授の教科書裁判を知り、地域の「支援会」づくりにかかわってから三十年近くになります。国内唯一の地上戦を体験した沖縄県民の戦争体験を掘りおこす作業を通じて、教科書検定の違憲性をいっそう確信してきました。幼児が「自決」できるはずがないからです。非戦闘民である一般県民の食糧を奪い、壕から追い出し、方言使用をスパイとみなした天皇の軍隊が、守るべきは国民でなかったことも教えています。

「戦争を暗く書くな」「戦争で国民が困ったことを書くな」「基地ということばを使うな」「民衆を書くな」など、いまの教科書検定は歴史の否定そのものではないでしょうか。「沖縄戦」の教訓、ひいては基地沖縄の現実、日本国民全体の教訓であり、米軍基地七五%の居すわる沖縄県の現実に目をつぶることがないよう願っています。

『教科書裁判ニュース』三三四号、一九九六・二・二〇

第二部 教育

1、地域が人を育て、人が地域を造る……

学校規模の適正化ということで、小・中学校の統廃合が巷間こうかん

大きな話題になっている。なかには地域とともに百余年、父祖以来四代にわたって歴史を重ね、多くの人材を育てている母校が消滅するのはのびないとの声も聞かれる。

そこで宮古における百三十年に及ぶ普通教育の変遷を回顧し、この問題を考える一助にしたい。

◇地域と一体で…

宮古の普通教育は廃藩置県三年後の一八八二（明治十五）年三月に始まっている。近世琉球の、主として役人の子弟のために現在の北小学校の地に開設されていた南・北両学校所に、県から各一人教師が派遣されている。生徒はおよそ五十人。当初の県派遣教師は大方県外出身で、六人の助手がいて方言しか知らない生徒の仲立ちをしたと伝えられている。同年十月、両校統合して平良小学校創立。

四年後の一八八六（明治十九）年には、西辺小（狩俣）、下地小（与那覇）、伊良部小（国仲）の三校が創立している。このあと福里、池前（佐良浜）、新里、多良間…と次第に全宮古に設置され、大正初期までには周知の十七校、分校二校（大神・水納）が開校している。どの学校も古琉球あるいは近世以来存続する集落の中心地域に設立されており、集落（校区）と密接に関わりながら発展してきている。

◇井戸の開削

例えば鏡原小は一八九三（大正十二）年、七原小と松林小が統合しての創立であるが、松林小は一八九五（明治二十八）年、平良小の細竹分教場から松林小へ、七原小は一九〇〇（明治三十三年）、同じく平良小の七原分教場が独立したのちの統合である。

明治二十年代、宮古農民が「島政改革」「人頭税廃止」をめざして、国会請願などで決起したとき、城間正安や中村十作が主要な役割を担っているが、地元では西里蒲（福里）、平良真牛（保良）、上原戸那（新城）、川満亀吉（嘉手苺）らが知られている。しかし如何にすぐれた指導者であり、活動家であつても地域にそれを支える基盤がなければ事の成就是困難であろう。

平良近郊では現在の鏡原校区がもつとも活発な地域であつたと伝えられている。一八九四（明治二十七）年三月、国会請願を終えて帰った農民代表の歓迎大祝賀会は鏡原馬場で催されている。その翌年四月、細竹分教場、さらに島政改革の前提となる「土地整理」事業が始まった翌一九〇〇年七月、七原分教場が開校され、これに先だつ同年四月には地盛井が開削されている。「この時期当学区では興隆の気運が人々の中に湧き立ったときといえよう」（『鏡原小六〇年』一九八四年）と明記されるほど画期的なことだったのである。

引きつづいて細竹、七原、山中、盛加、野原越、東地盛と、地盛井同様の井戸が相ついで開削されている。生活用水を限ら

れた「ウリガー」や天水のみに頼らざるを得なかった当時の人びとにとって、井戸の出現は、生活全般を大きく発展させたことであろう。

◇「六・三・三制」施行

戦後になって、宮原小は鏡原小から、宮島小は狩俣小からの分離独立であり、市街地の南小、東小は本土復帰後の創立である。

これよりさき宮古の行政当局は一九四八（昭和二十三）年四月、米軍の全面占領下であったが、本土に準じて独自に「宮古教育基本法」を制定して、「六・三・三制」を施行している。そのさい市街地の中学校は北、南、鏡原の三校で、狩俣、大神、西辺は北中の、久松、池間は南中の分校であった。その後、地域住民の強い要請で、分校は小学校に準拠して独立させている。南・北両中は統合して平良中となり、さらに北中が分離している。

城辺にしても当初は城東中と城南中の二校であったが、ほどなく城東は城辺中と福嶺中に、城南は西城中と砂川中の二校に分離独立し、現在に至っている。

地域の人びとにとって同じ義務教育である小学と中学は創立以来不可分の一つであり、行政にたずさわる者にしてもそこで生まれ育ったのである。歴史的に培われた地域住民の学校に寄せる心情は痛いほど熟知していたのであろう。

宮古は近代この方、面積や人口の割には県内でも有数の教育

熱心な地域として知られている。沖縄県を別にすると育英制度も宮古が最初である『沖縄県史 第四巻 教育』一九六六年。

一九〇五（明治二十八年）年、早くも島司を会長に始まっている。

設立当初から東京の大学に進学させている。一九〇八年四月、

町村制が施行されたとき、町・村に引きつがれている。先の大

戦で一時中断したが戦後復活し、現在に至っている。

◇気になる拙速主義？

「学校規模の適正化」で焦点の一つが児童数減からきた複式学級の解消と学校統合である。しかし児童数の減少を当該地域だけの責任にするのはどうであろうか。一九六〇年代の高度成長期から農山漁村の若もの、働き手を都市に集中させ、女性の社会進出や適齢男女の低収入等による少子化傾向、食糧の六〇％を輸入して農村の生産意欲をそぎ……等々。これらは大方国政に関わっているのではなからうか。

とはいえ教育効果を上げるといふ学校規模の適正化に異論をはさむつもりはない。ただ行政の拙速主義（？）が気がかりなのである。すでに報道されているように、文部省通達や関連法令でも「無理な学校統廃合を行い、地域住民等との間に紛争を生じたり、通学上著しい困難を招いたりすることを避けねばならない」（通達）、事情によっては「政令の定めるところより、数学年の児童または生徒を一学級に編成することができ」（法律）のだから、行政当局は地域が人を育て、人が地域をつくるという視点―地域の歴史と伝統に配慮して、もう少し慎重に対

応してほしいものである。

併せて宮古在住0歳児から学齢期までの児童数の推移、ひいては適齢男女数から予想される出生見込み数、過疎化に歯止めをかける基本施策等も周知すべきではなからうか。

『宮古毎日新聞』二〇一一年・一〇・一三

2、創立百年の北小と平一小

沖縄県で普通教育が始まったのは明治十二（一八七九）年の廢藩置県の翌年三月からである。従来の村学校に代わって首里に三校、島尻十校、伊江島に一校設立され、翌十四年には那覇二、普天間一、八重山に一校設立された。宮古はさらにそれより一年後となる。

明治十五年三月、現在の平良市立北小学校の敷地内にあった旧藩以来の南・北両校に、それぞれ各一人訓導を派遣、助手各六人を配置して始められた。同年十月三十日両校を合併、平良小学校と称した。「北小学校沿革誌」の伝える、宮古における近代教育のスタートである。現在市街地にある公立の二つの小学校——北小学校（北小）・平良第一小学校（平一小）——は、ともにこの日を創立記念日と定め、さきごろそれぞれに創立百周年記念行事を催したばかりである。

そのさい創立百年の榮譽を担うのはどちらか一校であり、他

方はそれから分かれたものであって、同一の創立記念日を持つのはおかしいのではないか、巷間このような話題がかしましく語られたものである。

あれから三年、ほとぼりも冷めたかにみえたのに、最近になって平一小の『百周年記念誌』が日の目をみたことで、またもやいづれが本物かを論ずる話題が、ひそやかに流れはじめている。「本家争い」というほどの大げさなものではないが、往年の卒業生ばかりか、百周年を祝ったばかりの当の小・中学生の間でさえ話題になっていると聞いて、いささか驚いている。

実際はどうなのか、両校の『百周年記念誌』が出そろったこの時期、改めて追跡してみるのも無益なことではあるまい、とペンをとった次第である。

『北小学校百年』は、近世末期から明治初期における宮古の教育事情を概括した上で、同校の沿革をおよそ次のように記している。

明治十五・一〇・三〇 平良小学校創立（現校地）

二一・三・二〇 平良尋常小学校と平良高等小学校
に二分

二二・八・二一 平良高等小学校を宮古島高等小学
校と改称

二四・一〇・一六 多良間分校設立（二六・九 独
立）

二八・四・一〇 細竹分教場設立（四二・一二 独

立)

三〇・六・久松分教場設立(三九・四

立)

三三・七・七原分教場設立(四三・八

立)

三七・五・宮古島高等小学校を平良高等小学

校と改称

四一・四・一平良尋常小学校と平良高等小学校

を合併、平良尋常高等小学校と称

す

大正 二・四・一 女子を分離、平良女子尋常小学校

設立(四・四 平良女子尋常高等

小学校)、校区は男女両校とも平良

五カ字

昭和 四・四・一 平良第二尋常高等小学校と称す

(校区は東仲宗根、西仲宗根、荷

川取三カ字)

一六・四・一 平良第二国民学校と称す

二二・六・一二 平良第二初等学校と称す

二六・一一・二九 北小学校と改称

それでは、平一小の方はどうか。大正十(一九二二)

年三月、当時の校長によって整備され、書きつがれてきた同校

「沿革誌」(『百周年記念誌』収録)は、三編構成で編述されている。第二編は大正二年四月(昭和四(一九二九)年三月まで)、男女両学校に二分された時期とし、それ以前を第一編、以後を第三編としている。第一編は平良尋常高等小学校、つまりは男子校側に残る沿革概要を記し、第三編は男女両校が消えて平良第一、平良第二両校の併立となった時点から詳述している。当然のことながら男女両校に分離した時の校区は、双方とも同じく平良五カ字で、平一小、平二小になったとき初めて二分されている。平一小は五カのうち西里、下里の両字、平二小は前述のように三カ字である。

校地はどうかというと、男女両校に分離する以前から、道へだてて南北両側にまたがっていた校地のうち、男子校が旧来の北側校地を占め、女子校は南側の現市役所の地に定めている。こうして平一小、平二小となったとき、平一小は女子校の地を占め、のち一九三二(昭和七)年に現在地へ移転している。

「平一小沿革誌」はそのさいの状況を「平良女子小学校ヲ平良第一尋常高等小学校ト改称シ町内字下里、字西里両字ノ男女児童ヲ就学セシム」と記し、さらに「附」として、「平良尋常高等小学校ハ平良第二尋常高等小学校ト改称シ町内字東仲宗根、字西仲宗根、字荷川取三ヶ字ノ男女児童ヲ就学セシメタリ」と記している。平二小(北小)「沿革誌」はその逆の記述で、同様のことを記している。女子校は平一小、男子校は平二小になったという意に読みとれる。さすれば女子校創立の大正二年が平

一小創立ということになろう。ちなみに「平一小沿革誌」第二編は昭和三年六月二十五日の条に、「創立十五周年記念式典挙行」と記している。

しかしこうした両校の「沿革誌」の記述にかかわらず、昭和四年四月、男女共学の平一小、平二小が誕生したとき、その前身たる男女両校は事実上合併した上で、校区を二分したとみるのが順当である以上、やはり創立起源は両校とも明治十五年へ遡及するという見解が生ずるのは不可避であろう。

それでも巷間小・中学生にまで取沙汰される理由は、やはり残るのである。宮古教育発祥の地に存続する方を平良第二小とよび、移転した方を平良第一小とした当時の、きわめて政治的色彩の濃い校名決定に寄せる当該地域の人びとの積然としない思いが、今日なおも尾をひいているように思われるからである。

『新沖縄文学』六六号・一九八五・一二・三〇

3、「国民学校」丸ごと六年

順調であれば一九三四（昭和九）年四月二日〜三五年四月一日生まれは、一九四一（昭和十六）年四月、国民学校初等科の最初の一年生でもある。国民学校はこの世に六年間しか存在しなかったの、最後の卒業生でもある。

日本の普通教育は一八七二（明治五）年八月の「学制」によ

ってはじまった。その後、一八七九（明治十二）年九月に「教育令」が公布されたが、これにさきだつ同年四月、廃藩置県となった沖縄県は、この「教育令」によって普通教育をはじめている。翌一八八〇年三月、全県に小学校十四校設置したのはじまりである。宮古は十四校に入っておらず、一八八二（明治十五）年三月、旧藩以来の南・北両校に新たに教師が各一人ずつ配置され、さらに同年十月三十日両校を統合して、平良小学校とした。現在の北小学校ならびに平良第一小学校の前身といえよう。

平良小学校は、修学年限の改正、校名変更など、その様々な曲折をへて、一九一三（大正二）年四月、男女別々にされ、さらに一九二九（昭和四）年、事実上の統合、即二分された。平良第一尋常高等小学校（平二校、現市役所の位置、のち現在地）と平良第二尋常高等小学校（平一校、現北小）の両校である。尋常高等小学校は一九〇八（明治四十二）年四月以来、尋常科六年、高等科二年の八年制である。中学校ならびに女学校には六年修了から、師範学校ならびに農林学校等の実業学校には高等科二年修了から受験できた。

遅れて近代をスタートした明治国家は欧米諸国に追い付くことを国是としていた。その基本政策が富国強兵と殖産興業である。そこでもっとも重視されたのが教育であった。全国津々浦々―北海道から沖縄県までひとつの言葉で通じあい、国の方針をむらなく行きわたらせる必要がある。一八八九（明治二十二）

年二月、「大日本帝国憲法」発布、翌一八九〇年十月「教育勅語」

発布、一八九一年六月「小学祝日大祭日儀式規程」等が制定された。これらにさきだつて一八八七（明治二十）年ころからは全国の学校に「御真影」なる天皇・皇后の写真が配布されている。憲法第一条は「大日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス」で、第三条は「天皇ハ神聖ニシテ侵スベカラズ」である。主権は国民でなく天皇にあつて、その地位は何ものによつても侵すことはできない、現人神といわれた所以である。こうした天皇を絶対視する憲法、教育勅語、御真影等によつて教育は、天皇のために一身を捧げる国民ニ皇民教育といわれた。現行の「日本国憲法」ならびに教育基本法の世界とは対極にあつたといえる。

それでもなお十分ではなかつたのであろう。一九三一（昭和六）年九月に始まつた「十五年戦争」の真つ只中、一九四一（昭和十六）年四月「国民学校令」が公布され、尋常高等小学校は国民学校（初等科六年・高等科二年）に改称された。国民学校令第一条は「国民学校ハ皇国ノ道ニ則リテ普通教育ヲ施シ国民ノ基礎的鍊成ヲ成スヲ以テ目的トス」とうたつてゐる。「皇国ノ道」とは「教育勅語」に示された「国体ノ精華ト守ルベキ道ノ全体」を示している。こうして神話を歴史とみなす皇国史観にもとづく国民ニ皇民教育がいつそう徹底された。

一九四五（昭和二十）年八月、日本の敗戦によつて、皇民教育は終止符をうち、戦後のいわゆる民主教育が始まるが、それ

でも「国民学校」は存続し、二年後の一九四七年四月、六・三・三制の施行で、小学校が誕生することによつて消滅した。このように国民学校は満六年存続したことになり、最長の満六年間学んだのは冒頭にふれた一九三四年（昭和九）年生まれのみということになる。同時にこの世代は六・三・三制にもとづく新制中学校最初の一年生であり、文部省の「あたらしい憲法のはなし」を最初に学ぶ世代でもある。戦後、疎開派、焼跡派、闇市派ともよばれるこの世代の一人として、つねづねこの時期のことを記録に止めておきたいと考えている。

『宮古研究』八号、二〇〇〇・一一・二〇

4、小学校に通わなかつた世代

最近の新聞で、「ボクらは小学校に通わなかつた世代です」との記事を読んだ。高岡岑郷という人の談話である。今どき小学校を出ない世代とは、といぶかりつつも「国民学校一年生の会事務局長」とある肩書きをみて、なるほどそういうことか、と肯いた。

明治以来七十年もつづいた日本の「学制」は、「十五年戦争」の末期、太平洋戦争を目前にした一九四一（昭和十六）年四月一日改革された。これまでの小学校（正式には尋常高等小学校）がなくなり、新たに国民学校が誕生した。戦争遂行のための「皇

国民の錬成(れんせい)」が目的とされた。神話を歴史として教わり、どの教科にも軍国美談が登場し、天皇を現人神あらひとがみと讃美し

て、戦争が美化された。「敵性語」なる語も登場、草野球での「ストライク」や「アウト」さえ使えなくなった。音楽では、「ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ド」にかわって「ハ・ニ・ホ・ヘ・ト・イ・ロ・ハ」、よみかた(国語?)は、「サイタ、サイタ、サクラガ、サイタ」ではなく、「アカイ、アカイ、アサヒ、アサヒ」、通知表の「甲・乙・丙」は、「優・良・可」である。本屋も少なく、とくに読みものもない時代、二歳上の兄の教科書をおして知っていた世界とは大違いであった。

四大節(新年年始式、紀元節、天長節、明治節)には登校して、皇国民―天皇の国民としてこれまで以上に天皇・皇后を神としてあがめる儀式が重んぜられた。毎月一日の「興亜奉公日こうあほうこうび

が八日の「大詔奉戴日たいしやうほうたいび」と変り、早朝全校児童あげての神社参拝―必勝祈願が強請された。

米英軍の連日の猛爆下でも、神国日本は不敗であり神風が吹いて鬼畜米英は撃滅される、と教えられ、信じ込んでいたが、一九四五(昭和二十)年八月十五日「ポツダム宣言」を受諾、無条件降伏である。五年生であった。しばらくすると、教科書の墨塗りが始まった。教師の指示にしたがって、修身や国史はも

とより国語に至るまで、既に学習済みのページにさかのぼってまで、何ページの何行めから何行めまで、と。超国家主義・軍国主義の終焉である。

それから一年有余後の一九四七年三月卒業とともに国民学校は消滅、今の小学校に生まれ変わった。国民学校がこの世に存在したのは満六年であり、一九三四(昭和九)年四月二日(三五(同十)年四月一日までの生れが唯一丸)と6年間小学校に通わなかった我が世代である。同時に、四月からは六・三・三制による新制中学の初めての一年生として、生れたばかりの「平和憲法」を最初に学んだ世代でもある。

ただし米軍の上陸で直接地上戦場となった沖縄県は、米軍全面占領下、一九四六年四月(宮古は六月)から初等学校に変わっている。六・三・三制は一九四八(八重山は一九四九)年からである。

このほど日本ペンクラブ会長に選任された作家で演出家の井上ひさし氏は、ペンクラブはイラク戦争反対声明や個人情報保護法案への抗議声明など、世の動きに敏感だ、声明を出すことに効果があるのか、との疑問に、「声明にアピール力がないのは、当たり前。言葉は最初は無力です。しかしその集積という歴史自体が値打ちと思っています」と答えている(五・一付『宮古毎日新聞』)。井上氏は「国民学校一年生の会」の代表世話人の一人としても「憲法九条を世界に広め、戦前の暗黒時代の再現を許さない」ための活動にも熱心に取り組んでおられるようだ。

この沖縄県は日米安保条約のもと、全国七五%の米軍基地をかかえている。小学校には通えず、初めて「平和憲法」を学習した世代の一人として、何をなすべきか、日々新たなものがある。

『宮古毎日新聞』二〇〇三・六・三

5、「サクラ」から「アサヒ」へ

昭和九（一九三四）年四月から、翌十年三月までに生まれた少年少女が、国民学校最初の一年生として入学した世代である。

それ以前の普通教育機関は尋常高等小学校と称し、尋常科六年制、高等科二年制であった。昭和十六（一九四一）年四月一日、小学校令が改められ、勅令で「国民学校令」が交付されて国民学校となり、尋常科は初等科と改められた。名称が変わったばかりではない。教科書もがらりと変わってしまった。

二歳上の兄の教科書によって知っていた一年生の「ヨミカタ」（読み方―国語）にでてくる「サイタ サイタ サクラガ サイタ」「ススメ ススメ ヘイタイ ススメ」等が消えてしまっていた。代わって「アカイ アカイ アサヒ アサヒ」「ヘイタイサン ススメ ススメ チテチテタ トタテテ タテタ」等に変わっていた。時代を反映しつつ、児童の年齢相応に感性ゆたかに受け入れやすく改めたのであろう。

ちなみに「サイタ サイタ サクラ…」は、大正十五年生から昭和八年生までが学び、それより以前の「ハナ ハト マスマス ミノカサ カラカサ」は、明治四十四年生まれ以後の先輩が学んだものである。

明治以来の伝統的な小学校が国民学校に変わったのは、「満州事変」から「日中戦争」と戦争に明けくれ、さらに「太平洋戦争」へ突入する、その直前のことである。

国民学校令第一条は「国民学校ハ皇国ノ道ニ則リテ普通教育ヲ施シ国民ノ基礎的錬成を為ス」とうたっている。「皇国ノ道」とは、「国体の精華と守るべき道全体」をさし、「端的にいえば、皇運扶翼の道」と解されている。「皇運扶翼の道」は「教育勅語」に明文化されている。

「教育勅語」は明治二十三（一八九〇）年十月三十日明治天皇が発表したものである。

国民学校初等科四年生のとき暗誦することを強請された。六十歳程度以上ならば大方記憶しておられることであろう。「父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ」という文言があつて、最近も政府高官のひとりが教育勅語に「着目しなきゃいけない」と語ったと報道されている。

父母に孝行し、兄弟仲良くたすけあい、夫婦は睦みあい、友とは信頼しあう―人として当然の徳目のようにみえる。しかしこの文言の後には、「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運を扶翼スヘシ」とつづく。

いざという時は、天皇のために身命をなげうつつくすべき「臣民の道」として示されているのである。

東京大空襲、沖繩戦、広島、長崎、等々。あるいは大陸や太平洋の島々での一般民衆を巻き込んだ悲痛な体験が、戦後の「日本国憲法」と「教育基本法」をうみ出したのである。今さら「教育勅語」や「国民学校令」の世界ではない。

「教科書展示会」は明治以来の教科書の現物並びにパネル等による解説をとおして、改めて、「教育とは」「教科書とは」等について考える場を提供することであろう。

◇ ◇ ◇

「教科書展示会」

▽日時＝二月四日（火）～九日（日）まで毎日午前九時三十分～午後五時三十分まで（但し、最終日は午後四時まで）

▽会場＝平良市中央公民館談話室

▽共催＝宮古教科書裁判を支援する会、沖教組、高教組、歴教協、後援＝平良市、平良市教育委員会

〔宮古毎日新聞〕一九九七・一・二九

6. 「皇国民」の道

本年七月二十五日は故仲元銀太郎先生の生誕百年の節目の日であった。銀太郎先生といえば、ゼロからの出発といわれた敗

戦直後の激動を生き抜いた人びとは、「新宮古建設の歌」を思いおこすのではなからうか。それほど戦後宮古の出发は、銀太郎先生の作詞したこの歌と密接に関わっているように思う。

◇ 「新宮古建設の歌」

さきの太平洋戦争で明治以来の「大日本帝国」は、アメリカ・イギリスを中心とする連合国軍の無差別爆撃にさらされ、一夜にして十万人を殺傷した東京大空襲、「沖繩戦」、……広島・長崎への原爆投下等をへて、無条件降伏した。敗戦で価値体系は百八十度の転回である。宮古も連日の爆撃で平良のまちはもとより、集落の大方は焦土と化した。人びとは衣・食・住はじめ、すべてに事欠き、飢えとマラリアが猛威を振るうなかとはいえ、焼跡でいつまでも杳然自失しているわけにはいかなかったであろう。

沖繩県は崩壊し、国との関係も失われたなか、米軍の占領行政が始まる以前に、宮古支庁はじめ町村役場は一定の活動を始め、情報に飢えた人びとのために新聞も再開している。宮古支庁は宮古民政府に改められ、米軍の許容範囲内とはいえ「自立」を模索し始める。小さな新聞や小さな文芸紙（誌）ではあったが、それに抛る若ものたちは「強力なジャーナリズムの形成」を求め、「文化立島」を標榜した。

宮古民政府は戦後の本格的な出発に向けて、「新宮古建設の歌」を公募し、戦火・敗戦で打ちひしがれた人びとの心を鼓舞するとともに、文化連盟並びに文化史編さん委員会を発足させ、伊

波普猷・富盛寛卓・慶世村恒任ら歴史研究の先駆者の追悼会を催すなど、先人の歴史に学ぶことから始めている。

「新宮古建設の歌」はこのように宮古の上下あげての新鮮な気運のなかで生まれ、当時の、とりわけ若ものらの新しい宮古建設への気運を高めていった。作曲は、銀太郎先生に一年若い故豊見山恵永である。

◇真摯な教育活動

銀太郎先生に初めてお会いしたのはいつであったか定かではない。しかし地元新聞社にいたころに名前を知ってから早や五十年をかぞえる。一九五九年四月、宮古水産高校の職員はガリ版刷りの校内同人誌『つどい』を創刊された。故砂川明芳、松原清吉、下地勉、下地康嗣、長浜郁子、仲元銀太郎先生ら十五人の名が五十音順に明記されている。巻頭に「はじめに」と題して、「時代なのだ。」生徒のいろいろな問題をこのことばでかたづけたくない。／吾々は「どうしてか」／を／試み／たいのだ。(原)ーと記し、「目次」の次には、「この集録は、お互いの話し合いの場を つくるために／お互いの知りたいもの しらべたいものを 提供しあうために／そして／いいこの場を作ることをも 目的にして／生みだすものである」と記し、十五人の名はこのあとにつづいている。敗戦後の米軍全面占領下、教職員の、次代を担う高校生をどう育成していくか真摯な姿勢をうかがわせている。壮大な祖国復帰運動が展開される一九六〇年代への胎動ともいえよう。銀太郎先生は、創刊号では「教

育職員免許法の手引、二号では「旅の教師」(一)、三号は砂川明芳単独の特集号(「多良間への報告」)のため、四号で「旅の教師」(二)とつづげ、さきの大戦中、研究訓導として二九年、伊勢神宮のある三重県に派遣されたときの生活を「創作」というかたちでまとめている。

◇「戦争体験」の聞き取り

一九六四(昭和三十九)年七月、請われて宮古教職員会に移り、機関紙の編集を中心に情宣活動を担当してからはお会いする機会はふえてきた。砂川小の教頭から大神小中、西城中学校長をへて祖国復帰の前年、一九七一年三月退職されている。そのころからは戦中の体験をいろいろお聞かせいただいた。三重県ではすべての教科書で「皇国の道」を研究し発表した、天皇の祖先神を祀る伊勢神宮にお参りする皇后を迎える人たちが「勿体ない有難いといつて皆泣いている」のに、「涙さえない」のは「沖縄にうまれたから、国民的意識が低いんだ、恥ずかしいと思ひ、劣等感にとらわれた」、新里(現上野)小に帰ってからは、防衛隊に召集され、教え十六〜十八歳の少年たちの隊長をさせられ、毎日十キロ爆弾を戦車に投げて死ぬ訓練をさせられた、敵の機銃掃射で四散した兵士の肉片を拾い集めた、高等科一年生の教え子が爆弾の破片をうけ麻酔なしで手術され、悲鳴をあげながら死んでいった、などを聞き取りした。戦後、銀太郎先生の平和運動、平和憲法のもとへの「祖国復帰」運動の原点をなす、これらの戦中体験は、『沖縄県史』第十卷(一九七

四年)に収録させてもらった。

◇好児さんとの友情

今も銀太郎先生を敬愛する多くの教職員を承知しているが、先生ご自身が親しくしておられたなかに、故平良好児がいる。好児は周知のように宮古における「文学の種まく人」を自負し、八十余年の生涯を駆け抜けた稀有の人である。総合文芸誌『郷土文学』(季刊)を九〇号まで発行し、この間八冊の単独歌集も上梓している。その『郷土文学』に銀太郎先生はほとんど毎号寄稿しておられる。その友情には只々敬服するばかりである。

内容は、小学校時代の師、慶世村恒任、与那覇春吉、金城栄治、下地恵常らへの敬慕の念とともに、故郷パナキシャ(＝豊原)から旧上野村にまつわる話題が大方占められている。「戦後の原点」では、「敗戦の廃虚に立って、私たちが実現を願ったのは、今のような快樂と消費の欲望のウズ巻く日本ではなかった」「貧しき中にも幸福はある。平和で道徳的に清潔な国、真実の尊重される国」だった(七三号、一九九一・一一)と記している。

◇「生誕百年」と「十三回忌」

一九九四年三月、新里小学校の教え子らによって、うえのドイツ文化村に「新宮古建設の歌」碑が建立された。一九九九年には、ご息ららによって遺稿集「流れ 流され」が上梓されたという。本年十二月二十六日は銀太郎先生逝いて十三回忌である。改めてご冥福をお祈りするものである。

『宮古郷土史研究会会報』一八一号、二〇一〇・一一・五

7、詩歌に親しむ

1、

初めて俳句を知ったのは国民学校初等科五年生のときである。二期の終わりごろか、三期の始めごろか定かではないが、敗戦後初めての冬であった。そのときの担任の先生の風貌は鮮明に記憶している。

教科書はザラ紙を束ねた薄っぺらなものであったが、確か見開き二頁に十句近く掲載されていた。何故かそのうちの二句記憶している、表記についてはいささか心もとないが、次の二句である。

元日や一系の天子富士の山 鳴雪

雪残る頂一つ国境い

子規

師範学校出身の担任のK先生のもっとも得意とする教科は体育とのことであったが、音楽以外はすべて担当しておられた。焼跡に兵舎を改装した隙間だらけのバラック教室から校庭に出て俳句をつくることになった。校庭の大方は戦中の食糧増産の名残りで耕地のままであったが、周囲は楠や梅檀、桜などの大木が茂っていた。句作に当たつての注意は、「五・七・五の中に

季節の言葉を入れる」ことだけであった。

所定の時間がきて、各自紙片に書いた自作の俳句らしきものを順次読みあげさせられた。しかし己れの句がどのようなものであったか、まったく記憶にない。それでいて先生がもつとも賞賛したH君の句は、数十年へた今も鮮明に記憶している。

「小春日に噴煙すこす桜島」である。

小春とは陰曆十月の異称のようだが、よどみなくなれる級友の句のすばらしさに感動するとともに、小春日という言葉を初めて知った日でもある。

H君はその後高校を卒えて北九州の電気通信学園に入り、どこぞの電信局で通信士になったと人伝に聞いたが、今も句作に親しんでいるか。時折りふと思ひ出す少年の日の一齣である。

『宮古毎日新聞』二〇〇七・三・三〇

2、

短歌に初めて接したのは、中学に入ってからではなかったろうか。戦後二年目の一九四七年、「六・三制」が施行され、新制中学校最初の一年生として入学した。その年の夏、兄の後を継いで新聞配達を始めた。当時は「朝日」や「毎日」等の全国紙も裏表二頁きりであったが、それでも一面下段には連載小説が掲載され、二面には月に何回か短歌や俳句の文芸欄があつて、目を通したものである。

二年生の時の国語担当のM先生は、若いころは書の修行で、

著名な書家や歌人を訪ね歩いたということでも知られていた。ある日の授業で、「諸君の知っている歌人の名をあげよ」と問われ、真つ先に挙手したY君が、確か「富安風生」「松田常憲」「牧暁村」……といったような名をあげていた。新聞の文芸欄でよく見受ける歌人（選者）らであった。

それからしばらくして、昭和天皇が「全国巡幸」の途次南九州を訪れた。同じ町内のK高校の高台から、運動場に集合した町民に親しく言葉をかけるといので、歩いて十分ほどのK高校まで全生徒先生に引率されて参列することになった。中学校ではこのことを記念して、全校生を対象に天皇歓迎の短歌を募集した。このころラジオや新聞は「人間天皇」宣言もあつてか、天皇の戦争責任を問うより、新憲法にもとづく「国民統合の象徴」として宣伝が大きかったように記憶している。

入選した短歌はすべてM先生の麗筆で色紙に記され、廊下の壁に掲示された。これを契機に一時期歌よみに熱をあげ、『毎日中学生新聞』等に投稿したりしたのだが、短歌には縁がなかったのであらう、いつか途絶えてしまった。

歌よみを指導されたM先生は西郷隆盛に心酔する一面もお持ちで、機会あるごとに「南州先生は……」とさまざまな逸話を語っておられたが、彼の地を去っていつか五十年、ご消息に接する機会を失ってしまった。ご健在ならば早や「卒寿」も過ぎておられようか。

『宮古毎日新聞』二〇〇八・六・二七

3、

現代詩について初めて教わったのは、宮澤賢治の「雨ニモマケズ」であった。敗戦後の二年め、国民学校六年生の一学期ではなかったろうか。運動場の大半はまだまだ戦中以来の食糧不足をおぎなうための名残り―サツマ芋や大根等の畑であった。

三十行からなる漢字、片仮名まじりの詩の初めの九行は、おそらく現在では周知であろう、「雨ニモマケズ 風ニモマケズ 雪ニモ夏ノ暑サニモマケズ 丈夫ナカラダヲモチ 欲ハナク 決シテ瞋ラズ イツモシズカニワラツテキル 一日ニ玄米四合 ト 味噌ト少シノ野菜ヲタベ…」である。玄米四合は教科書では「三合」と出ていた。父母らの蔵書からの知識であろうか、本当は「四合」だと指摘する級友がいた。

米軍の連日の無差別爆撃で地方の小都市に至るまで焦土と化し、いまだ復興の兆しも見えないころである。警察の統制経済下、主食の配給は一日二合三勺から二合一勺に減じ、しかも七分搗（つ）き、五分搗き、はては玄米のまま配給と、量・質ともに低下していた。一升ビンでの玄米搗きが流行った背景である。そのうち家畜の飼料であった 麩^{ふすま}まで食糧として配給される。野（雑）草の食べ方まで政府が奨励する（一時勢では、「一日三合」でも現実離れの感ありと言えよう）。

その後は、中学での記憶は余りない。高校に入ってから、

友人の影響もあって、藤村、啄木、犀星、朔太郎、光晴……を手当たり次第に読み、さらに中野重治、小野十三郎、伊藤信吉、原民喜、峠三吉、谷川俊太郎……ら。山之口貌の処女詩集『思弁の苑』を初めて手にしたのもそのころで、濫読そのものである。大方は図書館、さもなくば古本屋での立ち読みであった。

肝心の詩作はというと、生硬な言葉の羅列に終始し、抒情らしきものは見当たらない。詩歌に親しむどころか、いつか無縁の徒に成り下がっていくのを自覚せざるを得ない日々である。

〔宮古毎日新聞〕二〇〇八・一二・二〇

8、「宝の蔵を保つ」先生

国民学校初等科（現小学校）五年生のときに、「国史」上を学んだ。神話を歴史として教わった最後の世代である。六年生で「くにのあゆみ」、中学では、「日本史」を学んだ。

中三のときの日本史の担任は宝蔵保先生であった。「宝の蔵を保つ」と自己紹介されたような記憶である。若くして旧満鉄（南満州鉄道株式会社）に入社、選ばれて北京大学に留学した俊才というのが生徒間の噂さであった。日本史はるか「雲の上」から地上に降りてきたようで、新鮮そのものであった。時には下世話（げせわ）な話題も出たりした。

北京大学に留学中、夏場の銭湯で、湯上がりえつちゅうふんどしに越中褌えつちゅうふんどし一

つで椅子に掛け、団扇うちわを使っていると、まわりの人たちが気の毒そうにのぞき込んで視線をそらす。しまいにはそのうちの一人が「貴方は大事なところをけがしておられるようで、お気の毒です」と言われた。中国人には肌着として褌をつける習慣がなく、包帯をしていると勘違いしたのだという。

「四知」についても教わった。古代中国（後漢）でのこと、ある人が夜中に賄賂（わいろ）を持って来た。いくら断つても、誰も知らないのだから、受け取ってくれ、と執拗に押しつける。たまりかねたこの家の主人は、貴方は誰も知らないと言うが、少なくとも四人は知っている、「天知る、地知る、我れ知る、汝知る」と言つて、受け取らなかつた、という。

世はさきの世界大戦の敗戦直後、戦中以来の統制経済とは名ばかり、衣・食・住はもとよりあらゆる物資が極度に不足し、「闇ぐみ」商法が日常化していたころである。中学生にもよくわかる中国古代の故事であった。いつの時代にも上は大臣から贈収賄事件は絶えないが、それをきつぱりと拒絶する清廉せいれんの士もいたのである。

仮題『大陸での終戦』を執筆中で、時折り読み聞かせておられたが、ご上梓なされたであろうか。

『宮古毎日新聞』二〇〇四・五・一四

第三部 暮らしの周辺

1、「ヤーンブ・ジーナ」

ある日のこと、出勤して間もなく何の前ぶれもなく職場へ電話がかかってきた。「ヤーンブ・ジーナのジーナとはどういう意味だろうか」。一瞬「ジーナは貝（シナ）のことではないか」と思った。しかし電話の主は父祖代々伝統工芸を家業とし、方言を日常とする多くの高令者の方々にとりまかれている。この程度のこととはとくに確認済みであろう、まして思いつきの答えは失礼にあたる、あやうく言葉をのみこんでしまい、「調べてみたい」と答えていた。平良の南郊俗称ヤマガマのさきの「バダ」からヌヌドー（布干堂）に至る低地は、バサマともよばれ、ヤラウ木（テリハボク）の群生地であった。ンマ大将らに率いられてヤラウ林に分け入り、熟した実を拾ったものだ。表皮はかじって中核だけにし、さらに穴をあけて芯をとりだす。芯をとりだした中核、つまりは殻の表面をコンクリート塀などにていねいにこすって、なかが透き通って見えるほどに薄くしていく。ホタル籠のできあがりである。ヤーンブがホタルなら、ジ

ナは籠の意であろうが、本来の意は何だろうかということであろう。幼少時、ヤラウの殻から透き通って輝くホタルの幻想的な輝きは、なぜか貝の淡いピンクのなめらかな、それでいて透明な感触を連想させるのである。

〔宮古郷土史研究会会報〕六二号、一九八九・七・一四

2、不時着した飛行機

◇半世紀へての訪問

五十五年前宮古に初めて着陸（この場合、正確には不時着した飛行機のパイロットが半世紀余もへた今、改めて宮古を訪問したニュースが地元マスコミで大きく報道された。不時着から離陸に至るまで最も大きくかわった城辺町・福嶺小学校がPTA、同窓会あげて歓迎したようである。当時の回想談とともに、これを契機に「宮古に飛行場ができるようになった」とか、「陸の博愛美談」であり、不時着地点に「記念碑」を建立したいなど、様々な話題があがったことが報ぜられている。

◇「福嶺小学校沿革誌」の記述

各紙の伝えるところによると、一九四一（昭和十六）年十二月八日の太平洋戦争開始一か月余後の、明けて一月二十四日、台湾へ向けて飛行中の戦闘機六機編隊のうち、編隊長・陸軍中尉小田泰治氏（当時二十二歳）の操縦する一機が、宮古上空

でエンジントラブルで、福里の北海岸近くの原野に不時着した。同機には小田中尉のほか通信兵一人が同乗していて、「飛行場を知らせてほしい」旨の通信を投下するとともに、およそ二十分間上空を旋回したのち、現在の城辺町野球場付近の原野に不時着したものである。機体に損傷はなく、連絡を受けて那覇からきた整備兵によってエンジンは調整された。一か月余にわたって離陸に必要な仮の滑走路が設営され、無事に飛び立たせた。

その間二人は平良の漲水港近く、現在の共和ホテルの位置にあった日の丸旅館に宿泊して、毎日馬で作業状況の視察に通った。整地作業はおそらく宮古支庁が指揮したのであろう。一月にわたって小学生から、青年団、一般人まで動員、用具持参、手弁当の作業である。二人の搭乗員を慰問、激励するために、映画館「新世界」（現在のホテルうりずんの位置）で演芸会が開かれたという。地上で、身近に初めて見る飛行機——当時最新鋭のメカに対するめずらしさ、あこがれのようなものから、官民をあげての対応であつたろう。「福嶺小学校沿革誌」には次のように記されている。

一月二十四日 零時三十分台湾方面へ向ケテ飛行機六

機中一機故障、字福里北海岸ノ浦底平地ニ不時着（午

後一時頃）。低空飛行スルコト約二十分（飛行中福嶺

校北西松林中ニ「飛行場知ラセテ下サイ フジチャク」

ノ紙片ヲ落ス。ソレヨリ職員総出トナリ不時着ノ選定

ヲナスト同時に役場、駐在、平安名崎〇〇ニ急報ソノ

中前記平地二乗者、機体無事着ス。

二月二日 宮城教頭、新城專訓ハ飛行機不時着地均
工事へ青年団引率。

二月三日 企 前記工事へ池村、砂川訓導児童ト共ニ
出仕。

四月三十日 感謝状ヲ受ク 各務原陸軍航空輸送部

支部 節川原野ニ不時着セル機長陸軍中尉小田泰治。

◇平良から徒歩で見学

国民学校初等科一年生であつたが、母の死ともからんで、当時の状況はきわめて鮮明である。太平洋戦争開始間もないとはいへ、子どもの世界に戦争気分らしいものはない。旧盆明けのアダンアース、秋のタカ飛ばし、正月のタコ上げなど、里ごとの遊びはのどかなものであつた。

城辺に飛行機がおりた話はいち早く子どもたちにも聞こえてきた。誰からともなく、日曜日には皆で見に行こう。イリ里の子どもたちは衆議一決、日曜日早朝から見に行くことになった。乗りもののない時代である。当然のことながら大人も子どもも歩いて行く。出しなに當間商店の裏の石垣によじのぼり、各自大きなザクロを二つ、三つもぎとつたのをよく覚えていたのに、昼食をどうしたのか記憶にない。平良の東のはずれまで行くと、飛行機見たさの人の群れがつづいている。その後につづけばよいのである。

初めて見る飛行機は野原に停止し、何本かの杭にワラ縄を張

りめぐらせて囲われ、近づくことはできない。何回その周囲を廻つて眺めたことであろう。そのうち飽きてしまった。すぐ近くは海辺に向かつて二、三十米はありそうなスロープである。先に飽きてしまった子どもたちであろう、草束を尻に敷いてソリのように滑っている。面白そうである。仲間に入つて、何十回滑つただろうか。気がついたら、一緒に居たはずのイリ里の子は一人もいない。さあ大変だ。一人取り残されたのだ。どうしよう。

あわてて来た時同様に人群れについて駆足したり、歩いたり。そのうち心なしか人群れが少なく感じられる。この道は平良への道であろうか、家に近づいているのであろうか。いつか泣きべそをかいていたのであろう。煉瓦の上に、二、三人の男女が乗った馬車が追い抜きながら、声をかけてきた。「お前は一人か、どこへ行くのか」と。「平良へ」というと、一斉に振り返り、「一人で平良へか、それは大変だ。乗りなさい。途中まで送ろう」といつて、乗せてくれた。途中小雨に降られたが、無事帰れそうに喜びに冷雨も気にならなかつた。次第に薄暗くなりかけたころ、今の空港近くで別れた。

◇母の死と重なる回想

イリ里まで歩いてくると、料亭菊水の前の十字路で着物姿の母が立っていた。早朝出たきり帰つてこない小学一年生の息子を案じて、一月の冷雨の中、待ちあぐねていたのであろう。母の姿を見たたん、緊張の糸が切れたのか、母子ともに泣いて

いた。二旬後母は死んだ。初めて見た飛行機はいつも母の最後と重なって回想される。半ズボンの尻が雨で煉瓦色に染まっていたことまで鮮やかによみがえってくる。

『宮古郷土史研究会会報』一〇一号、一九九七・三・一九

3、叔母の訓え

「布団は掛ける」「座布団は当てる」「傘は差す」と言うのですよ。布団をかぶる、座布団を敷く、傘をかぶる、とは言わないのですよ。

国民学校（現小学校）四年生のころから、事実上の親代わりであった叔母は、折りにふれてこの種の言葉を口にし、さほど意識せずに日常の言葉遣いを直してくれた。

ついでに言えば、食事の作法から、夜具の収納、部屋や縁側、庭の掃除、障子のはたき方に至るまで、こまかく仕付けられた。

俗に、小さなことに一々ロやかましくいうのを、箸の上げおろしまで小言をいう、と言つて敬遠する。その限りにおいては叔母の仕付け方も、あるいはその範疇に入っていたのかも知れない。しかし当時十代にさしかかったばかりの少年には、そのようにうるさく感じられた、という記憶はない。叔母の言葉に押しつけがましいところがなかったからであろう。あるいは状況に即しての話題ゆえ、無理なく受け入れていたのかも知れない。

い。

むしろ当初大変だなと感じたのは、掃除に関する限り朝夕二回、小さいとはいえ庭や前の道を掃き、縁側や汲み取り便所の雑巾かけをさせられたことである。朝の洗面前と夕食前の二回。何しろ生家では、庭はおろか部屋の掃除などという習慣さえもなかったのだから。

時に下校が遅くなったりすると、薄暮の掃除となり、さすがに堪えた。掃除しなければ我が家の前のみ落ち葉等が散らかっていることになる。朝夕の自宅周辺の清掃は、屋敷林の多い当時の地域社会では日常的な慣習であり、ごく普通の光景であった。この日課は中学卒業までつづいた。

あれから五十余年、叔母の訓えはどれだけ生きているのだろうか。時は環境月間、顧りみて忸怩たる思いである。

『宮古毎日新聞』二〇〇三・八・二六

4、新聞との出会い

新聞を身近なものとして意識するようになったのは、小学校（当時は国民学校初等科）四年生のころである。戦時疎開で転校した南九州のある小さな町でも、町内会ごとに少年団のよきな組織があつて、新聞配達まで請け負わされていた。五体健

全な男たちのおおかたが戦場に、軍需工場に動員され、国鉄の駅員までおおかた女性ばかりであった。

当時は知る由もなかったが、戦時統合で一県一紙にされた「官報」といふべき県紙の配達である。高等科の上級生が手配し、一人で十軒程度であったろうか。街灯もない真つ暗ななかで配達した。那覇や宮古の「二〇・一〇空襲」、さらにその後が続く沖縄戦も、その新聞で知った。

戦後間もなく中学に入り、二歳上の兄が事情も一変した新聞の配達をしていたせいで、その手伝いを始めた。学業の多忙を理由に兄が手を引いていく分、こちらの分担当が次第に増えていき、二学期に入るころにはそっくり一人で背負いこんでいた。

未明に一番列車で駅におろされる県紙の束をほどこいて受け持ち分を受けとり、一時間半かけて配達した。夕方は下校時、販売店に立ち寄って全国紙二、ブロック紙一の三紙をとり、帰宅がてら配るのである。いずれも朝刊で、夕刊はまだなかった。ウラ・オモテ二ページ建て、県紙は週一〜二回はタブロイド版二ページになったりした。転居でもしてやめる人がでない限り、新規購読は無理であった。

おかげでよく抜き取られた。そのつど販売店の親父さんから学校に電話が入り、叱責されたものだ。何しろ余分がないのだから、親父さんとしても配達少年をしかるしか怒りのもつていきようがなかったであろう。

二ページきりの小新聞ではあったが、二面下段には小説も連

載されている。この配達少年はいつかまじめな読者にもなっていた。下校時の配達で残り少なくなってくると、路傍で夕もや立ちこめるのも忘れて、三紙を隅々まで読んでから最後の何軒かに配った。

必要と思えるものはノートに書き写しもした。おかげで東京裁判や昭電疑獄など時事問題についてはいち早く、しかも詳しく知るようになった。先生に何か一つ褒められると、どの教科にも精を出すようになる。あのころほど文章を読むことに喜びを感じたことはない。

いまはどうであろう。朝目が覚めて出勤までの間に、未明に配達された地元二紙にざっと目をとおす。職務にかかわりそうなものだけを読み、あとは見出しだけで済ませます。県紙は出勤後にしか配達されないので、夕方帰宅後、朝夕刊一緒ということになる。

まず朝刊からざっと目をとおす。その上で一面下段のコラムを読み、ついで文化、地方、教育、社会面の拾い読みということになる。とくに地域の催しものは宮古に限らず、他地域まで丹念に目をとおす。夕刊はざっと目をとおしたあとは一面下のコラムから読む。この手順は三十余年判で押したように変わらない。

企画ものでは「琉球王国の興亡」は講談風でおもしろく、いまは「タイムスリップで琉球」「琉球・漢詩の旅」「歴史の道を歩く」等を愛読している。恒例の「年末回顧」もよい。

ここで注文を一つ二つ。地域行事に関しては、例え同じようなものでもむらなく扱ってほしい。同じような行事が宮古でもあったのに、宮古は掲載されないことが度々ある。身びいきで実際以上にそう思うのであろうか。スペースの都合で数日遅れはてはボツにせざるを得ない場合もあろう。そのときはせめて半分、いや三分の一に削ってもやはり扱ってほしいものである。その地域にとつては二度とない貴重な記録であり、また長年家郷をはなれた郷友へのよき便りとして、大事にしてほしいと思うからである。

そのような次第で、社の精鋭スタッフによるであろう社説は、つい読み落としがちである。職務や所属組織にかかわるもの以外は大抵見出しだけで終わる。それでも最近すっかりと読ませてもらい、共鳴したものは、細川連立内閣の「小選挙区制比例代表並立制」に関するものがあつた。

細川連立内閣は登場前から、外交・防衛・はては内政まで自民党内閣を継承すると公言しているのに、マスコミの伝える限り、国民の期待は大きなものがある。それは戦後四十年近く続いた自民党内閣に代わつての登場だからであろう。自民党と違つて何かをしてくれるかもしれないとの期待がかかつても不思議はない。しかし登場早々、歴代自民党内閣がなし得なかつた小選挙区制を政治改革の第一に掲げている。社説は、米軍全面占領下の沖縄で、小選挙区制による立法院議員選挙を振り返りつつの警鐘として読めた。

全国の七五%もの米軍基地をもつ沖縄県である。日米安保条約も軍事基地も無関心ではおれない現実がある。定数一で、多数意見が反映されない小選挙区制では、平和と民主主義を基調とする憲法が改正（悪）されるのではと、懸念するのは当然ではなからうか。

地域の人びとの大きささまざまな動向とともに、平和と民主主義を脅かし、沖縄県の命運を左右する現実については、これからも県民の立場から勇気をもって報道してもらいたい。

『琉球新報』一九九三・一〇・一八

5、新聞一家

◇平一校同期の旧友

学業半ば十五歳でハンセン病を発病し、療養所で治療に専念しながら、成人後は自治会活動に参加して入所者の待遇改善や権利回復等のために尽力した宮里光雄こと、瀬名波清氏が病（臍臓ガン）のため、本年九月十八日永眠した。七十六歳。平一校同期入学の旧友である。

一九七〇年代ごろからの氏の、「らい予防法」で強制隔離された入所者の人権確立、差別の連鎖を断つ活動は周知のとおりである。「全療協」に拠つて国の政策の誤りを裁判で認めさせ、「ハンセン病問題基本法」を制定させて、これから入（退）所者の

安定した老後保障をはじめ、地域社会と共生する宮古南静園の将来構想を具体化していく、この時期の逝去である。本人はもとよりすべての関係者にとって痛恨のきわみであろう。

◇新聞人を完うした父

宮里氏は一九三四（昭和九）年十二月十八日、平良・下里二番地で、父進（旧名・起昌）、母やぶのの七男二女の八番め、六男として生まれている。父進は十九歳で代用教員となり、日露戦争では現役召集を体験している。その後台湾に渡って教員や警察官になったが、大正半ば帰郷後は一時教職についたのち、草創期の宮古新聞界での活躍、生涯を新聞人として完うした著名人である。

宮里氏が学令に達したのは「十五年戦争」真只中、一九四一（昭和十六）年四月一日、尋常高等小学校に代わって国民学校が創立した時である。これよりさき四紙あった地元新聞は、国の戦時言論統制で同年二月一紙に統合されている。このため一九二二（大正十一）年十一月、父進が創刊し、以来社長兼主筆をつとめていた『宮古民友新聞』は廃刊させられている。四紙統合による新しい新聞は『宮古朝日新聞』。記録によればブランケット版、四頁建て、隔日刊である。父進は引きつづき社長兼主筆をつとめたようだ。新聞社は近年まで下里市場近く「レストラン銀座」のあった辺りで、道をへだてた向かいに印刷所があった。新聞等を印刷していた。

◇魅力的な新聞印刷

平良第一国民学校初等科の同期入学とはいえ、始めから面識があったわけではない。記憶は定かではないがおそらく二、三年生ごろではなかったろうか。住まいが同じイリ里というよしみからであったろうか、いつか言葉をかわすようになっていた。下校時には少し寄り道して印刷所の前を通り、入口のガラス戸越しにこっそりのぞき見したりする。印刷機上に数センチほど積み上げた大判の白紙を熟練の職工が一枚一枚大型のローラー状になった部分にはさみ込む。そうすると一面活字の文字で埋めつくされた新聞が向こう側に出てくる。何回見ても飽きないのである。おまけに刷りあがったばかりの紙面のインクのおいが外までただよってくる。何とも言えない魅力である。

◇新聞社主催の綱引き

時折りには向かいの住宅兼編集室らしき玄関に接した、籐椅子の並ぶ部屋にさそわれて、アメ玉であったか梅鉢であったかを振るまわれたりする。宮古で唯一の新聞社であり、よそでは味わえない体験であった。

ある年の夏も終わりに近く涼しくなったころであったろうか。市場通りと下里通りの交差する十字路を中心にして、東西に分かれて大綱引きが催された。西側のはずれはちょうど新聞社付近で、そこで引いた記憶である。平良の大綱引きは古くから宮古支庁前と聞いていたので、おそらくは新聞社の何かの記念事業ではなかったらうか。

一九四四（昭和十九）年夏、戦時色濃厚となって宮古でも軍

用飛行場の建設が始まり、万余の軍隊が展開してきた。料亭の立ち並ぶイリ里には昼も夜もカーキ色の軍服を着た将兵の往來のみが目立つようになったころ、戦時疎開が始まった。宮里氏の一家は台湾へ、当方は九州である。

◇新聞一家

十余年ぶり帰郷し一年余療養のち宮古毎日新聞社に勤めた。そこには平良好児編集局長のもと、次長として瀨名波栄氏がおられた。宮里氏の三兄である。二年勤めて日刊南沖繩社の創刊に参加した。

そのころ地元紙によく寄稿しておられた瀨名波昇氏と親しく言葉をお交わすようになった。四兄である。また、時折り雑誌『芸春秋』の随筆欄に確か東京都庁職員の手書きで随筆を書いておられる瀨名波武氏は元は『読売新聞』の記者であり、次兄であることを誰からともなく聞かされたものである。

一般に、子は親の背中を見て育つというが、宮古の新聞界草創期に貢献した瀨名波進の男子三人はいずれもその道を歩んでおられる。とりわけ栄氏はその後、著述活動を兼ねて先の大戦中の宮古・八重山の状況を精力的に調査し、『太平洋戦争記録』先島群島作戦(宮古篇)など、多くの著書・論考を発表しておられる。だが、三兄・四兄お二人から弟清こと宮里氏について一度も話は出ていない。

◇五十余年振り「再会」

旧平良市役所を退職して二年めであったろうか。同年生の故

平良市教育長砂川道雄から、宮高四期卒の「卒業四五周年記念誌」を出すので協力してくれと声をかけられた。四期卒なら大方平一校同期入学生である。席上、当時もはやハンセン病に関心を持つものなら誰れ知らぬものもないであろう、宮古南静園入所者自治会長・宮里光雄が、旧友瀨名波清その人であること知らされた。五十余年振りの「再会」である。

「らい予防法」のもと、強制隔離された入(退)所者の人権回復のために、壮絶な生涯を貫いた旧友瀨名波清とは、一度も往事を語ることなく逝かせてしまった無念を噛みしめる日々である。合掌

『宮古郷土史研究会会報』一八七号、二〇二一・一一・一一

6、「社説」と「論壇」等の常設

◇新聞との出会い

少年時代から新聞記者にあこがれていた。そのせいか新聞とのお付き合いは結構長い。中学一年生の夏休みに入り、兄の後を継いで新聞配達を始めた。卒業までの三年近く毎日朝夕二回数十軒に配達した。戦中に続く敗戦直後で、衣食住はじめ極端なモノ不足であった。新聞も例外ではない。紙も不足し県紙はもとより、「朝日」や「毎日」の全国紙も表裏二頁建てであった。それでも一面下の俗に「フンドシ」とよばれる無署名のコラム

や連載小説は毎日、短歌や俳句欄も月に一、二回は設けられていた。

早朝の配達は駆け足であったが、下校時には徒歩でひろい読みながら配ったりした。卒業間近になって、学級のタイムカプセルにはためらうことなく、将来は新聞記者と書くほどに、新聞はなによりも身近な存在になっていた。

高校は、二浪して入ったが、浪人中も入学後も十指を超すさまざまな職種バイトに明け暮れた。とても新聞を購読するゆとりはない。代わって、夜間各新聞社（支局）前の掲示板の梯子（はしご）酒ならぬ読み歩きをしていた。

◇新米記者と取材拒否

社会人としての本格的な出発は、一九五七年十月、宮古毎日新聞社である。ここはまだ二頁建ての小新聞であった。入社試験はなく、原稿用紙三枚でいどの作文を書かされ、数日後採用通知がきた。編集局次長に伴われて官公庁や主要会社、団体等に入社の挨拶廻りをひととおり終えたところで、最初の大きな取材は平良市長選挙である。二期八年勤めた現職の後継新人候補に対する、大物の新人候補に取材拒否された。政敵側（？）の新聞とみなされたのである。ケンもホロロの玄関払いであった。

このように近代この方宮古の新聞がつねにどちらかの側を代弁する機関紙（？）とみなされ、新米記者が泣かされたのは、いつごろまでつづいたのであろうか。

こののちはさらに行く先々で親類縁者や知人がいて大抵のこととはその日のうちに伝わってしまう、小さなシマ社会であることをも日々実感させられた。今さらのように、四面環海小さな地域社会に根ざす地元紙の在り方について、考え込んだものもある。

◇民衆運動と新聞

一六〇九（慶長十四）年、琉球王国は薩摩藩に侵略された。奄美諸島は直轄領として割譲され、本土（他藩領）との往来の禁止など、さまざまな制約のなかで、王国体制の維持、整備がはかられた。その一環として宮古・八重山には王府派遣在番役人が常駐し、従来の間接統治から直接統治に変わった。人頭税制も整備される。現在ののような収入や財産等への賦課ではなく、数え十五歳以上、五十歳未満の男女を納税義務者とし、主として穀物と織物を納めさせられた。

土農の分離―税を取り立てる側・系持ち（士族）と、納める側・無系（百姓）―で、士族は役人への登龍門、百姓は生涯原則として百姓身分のままである。いつか役職に安住した役人の綱紀がゆるみ、職権が濫用されるなかで、台風、かんばつ、飢饉ききんが襲う。疲弊した民衆の筆舌に尽くし難いさまざまな苦難の歴史が伝えられている。

一八七九（明治十二年）、廃藩置県で沖縄県が誕生した。しかし明治政府は旧支配層への配慮から「旧慣温存」策をとった

ために、人頭税制は存続した。宮古民衆の人頭税廃止運動は、宮古島役所、那覇の県庁交渉をへて、代表四人を上京させ、政府ならびに国会請願へと発展する。一八九五年一月、「沖縄県宮古島々費軽減及島政改革請願」は、貴・衆両院議会で採択され、さらに議員発議で「沖縄県政改革建議案」も可決された。こうして「土地整理」をへて、一九〇三年一月、人頭税廃止はもとより、沖縄県全体の真の近代化が始まった。

この宮古民衆の人頭税廃止運動の成功の要因はいろいろあげられようが、何よりも民衆自身の結束に加えて、よき指導者の登場、さらには在京報道機関（新聞）の全面的な支援があげられる。宮古に生まれ育ち、宮古の方言しか知らず、読み書きも困難な農民が初めて東京へ出て、政府や国会に請願する。その困難さは現代人の想像をはるかにこえていよう。在京の新聞各紙は、「琉球の佐倉宗五郎上京す」「宮古島民の惨状」「三万の人民苛政に泣く怪事」、今どきこのようなことが許されてもよいものか、と一斉に糾弾し、連日報道している。

◇「社説」等の常設

周知のように戦後日本は「十五年戦争」の反省の上に制定された「日本国憲法」にもとづく民主主義の国である。間接民主主義―代議制で成り立っている。市（町・村）民が直接市（町・村）政を運営しない代わりに、首長や議員が選出されて担当し、市民の立場で運営されるよう論議する。しかしその全容がすべて市民に伝わってくるとは限らない。そこで新聞やテレビ・ラ

ジオ等の報道機関の役割が何よりも大事になってくる。

市民の立場からは、報道Ⅱジャーナリズムはつねに反権力でなければならぬと考える。もちろん善政はほめればよい。しかしいささかでも問題点があれば徹底して取材し、追求して報道する。市民の「知る権利」に応えるための「報道の自由」を発揮すべきであろう。市（国）民の暮らしと権利、反戦平和に関わることで「地方自治にはそぐわない」ことなど何ひとつない。国政すなわち県政であり、市町村政に直結している。

毎早朝配達される地元紙は、もはや「新米記者」のころとはくらべようもないほど各面にわたって充実している。強いて言うなら、固有名詞（人名・地名）や民俗行事、匿名投書等の取り扱いは一応おいて、報道の割りにはニュースの背景・本質をつく解説が乏しく、論壇のないことである。手始めに「社説」を常設したらどうであろうか。一考をうながしたい。

『宮古毎日新聞』二〇〇八・一〇・一七

7、西里は「文化の玄関」 イリザトゥ

平良のまちはかつて漲水泊（港）とよばれた平良港を中心に発展してきた港町である。今や人の往来は航空機にゆずったが、一九七二（昭和四七）年五月の本土復帰ころまでは県内外の人

も物もすべて平良港を起点に往来していた。下地・城辺・西辺（狩俣）への放射状に伸びる陸路の起点も港だったのである。

港周辺の地名は、狭義には「クヤー（小屋）」とか漲水、広義には「イリ里」とよばれている。生まれ育った里である。クヤーとは小屋が立ち並んでいる地域、漲水は海辺の湧き水が走るように見える（走り水）ことから来た宛て字で、かつては港名にもされた、イリ里とは平良のまちの西方に当たる集落という意味である。

漲水の泊は近世琉球において、宮古から首里の王府に租税として納付する穀物や織物を積み出し、外からは王府派遣の在番や祥雲寺住僧、詰医者、講解師、時には検使団など、諸役人が往来した。当時はすべて帆船であり、風待ちのために、そのつど二〜三か月、時には半年以上も長期にわたって滞在する。そこで無聊に苦しむ乗組員らに飲食を提供する小屋が立ち並んでいた、それゆえの「クヤー」である。

宮古の与那覇勢頭豊見親が沖繩本島の王権と初めて公的交渉を持ったのは、西暦一三九〇（洪武二十三）年である。そのときは平良の北東に位置する白川浜から星を頼りに船出したと伝えられているが、その子泰川大殿は病い（伯牛の病）のため平良の西方トゥリバー近くに隠棲、孫大立大殿はイリ里に館を構えていたと伝えられている。このころ、早くも漲水の泊が那覇への出入港になっていたことを示しているであろう。

周辺には多くの遺跡や文化財がある。大立大殿の館跡、その

墓「ミヤーカー」はじめ、古来宮古最高の聖地とされる漲水御嶽、一五〇〇（弘治十三）年、八重山のオヤケアカハチらの事件のさい、首里王府軍の先導役をつとめた仲宗根豊見親が開設した行政庁「蔵元」跡、その墓地、三男知利真良豊見親の墓、アトンマ墓、さらには薩摩藩検察使の進言で一六一一（万暦三十九・慶長十六）年開山された臨濟宗の古刹龍宝山祥雲寺、権現堂跡、観音堂、貢布座跡、宮古上布の祖・稲石碑、石覺道、一九二五（大正十四）年創建の宮古神社など、国・県・市指定文化財等が集中する地域である。

一八七九（明治十二）年の廃藩置県後は、国や県の各種官衙・学校等が立ち並び、一九〇三年、人頭税廃止後、急速に進む各種産業の発展を当て込んで込んで那覇や県外からの所謂「寄留商人」によって市場通り、西里通り、下里通りが形成される。公設市場が開設され、クヤーの飲食店は大正中期以降、西寄りの広い地域に移されて、サカナヤ（料亭）街を形成していった。

明治末期〜昭和初期、宮古は宮古上布、黒砂糖、カツオ節の三大特産品で全国に名をあげ、好景気に湧き返った。サカナヤー通りの農漁村の新興成り金達はビールで足を洗ったなどと、まことしやかに語りつがれている。人口六万そこらの宮古に四十軒近い料亭が立ち並んだのだ。

経営者のほとんどが商店街同様、首里・那覇か、県外出身者で、そこで働く女性達もほとんど那覇の辻ゆかりの人びとである。弦歌さんざめくなく、首里・那覇の言葉が普通に飛びかい、

琉球音楽の楽譜「工四」のない宮古民謡を所望するものは田舎者扱いで、相手にされなかったという。くわえて材木倉庫変じて芝居小屋となり、那覇からの一座が興業する。おかげでイリりの人は門前の小僧よろしく沖縄本島の方言に慣れ親しむ。

電灯も電話も平良のまちにしかなく、宮古で唯一の映画館「新世界」では、弁士付き無声映画からトーキー映画まで上映される。さらにいえば「十五年戦争」のころ出征兵士の見送り、無念の思いで戦場に消えた無言の帰還をも迎えた。これらはすべて港からの往来であり、「イリ里は文化の玄関」だと胸を張ったとしても不思議はない。

昭和初期に生まれたイリりの少年少女たちは、こうした環境で生まれ育つたのである。第二次世界大戦後の一九六〇（昭和三十五）年代ころまで、農漁村の子はたまに、平良に出て映画をみ、帰りにそば屋でそばを食べるのが何よりも楽しみであった、と真顔で述懐する。同じころ県外への集団就職の少年少女も「金の卵」ともてはやされ、ここから巣立つて行った。

今や人の往来はすべて空に移り、港には人はいない。料亭はバー、キャバレー等に変わり、五軒に増えた映画館も消えた。道も狭く車社会に対応できそうもない。港を背景にした、かつて那覇について県下第二の都市といわれた平良の、「文化の玄関」イリりの面影はもはやない。平良港そのものも大きく変貌して、平良の二大景勝地としてもてはやされた「ヌヌド」も「マイヌモー」も若ものたちのよき語らいの場―青春を回想する「パ

ウ崎」もない。

〔宮古郷土史研究会会報〕一四四号、二〇〇四・九・九

8、漲水港と周辺景観

五月八日、平良市下里の平良港第四埠頭に面して、宮古広域文化ホール「マティダ市民劇場」はじめ三つの大型施設がオープンした。それにともなつて離島航路の発着場所も第二埠頭から第四埠頭へ移動し、新しい賑わいをみせている。

三つの施設は、中央に四階建ての港湾ターミナルを配し、右手が同じく四階建ての市民劇場、左手は十二階建てのホテルである。一九七二年祖国復帰記念事業として旧宮古神社跡地に建設された市民会館が老朽化してきたために、市民の各種集会はもとより、プロの音楽、演劇公演も可能な音響、照明ともに完備した市民劇場のお目見えである。港湾ターミナルの方は一九六八年、第二埠頭に面して建設されたものだが、同じく老朽化し、かつ手狭になってきたために移転、新築したものだ。いまひとつホテルの方は第三セクターによって建設、民間企業による委託経営である。三つの施設を通じ、大小さまざまな集会、ショッピング、食事等も可能で、平良のまちに新たな人の流れがはじまっている。

ここでは港湾ターミナルの移転にともなつて、伊良部、多良

間などの離島航路の発着場所も移ってしまい、歴史的に最も由緒あるこれまでの第二埠頭周辺、いわゆる漲水の地がさびれていくのをどう防ぎ、活性化をはかっていくかについていささか考えてみたい。

旧港湾ターミナル周辺と、そこへ通ずる沿線で商う人びとによれば、道行く人の数がめだつて減り、客足はおよそ三分の一、そのうえフリーの客は止まってしまったという。小さな町中で、一方が賑わえば他方がさびれるではなく、それぞれが特性を生かして共に繁栄し共存していくすべはないものであろうか。

◇平良の都市形成の歴史

都市の発生にはそれぞれその土地特有の歴史がある。周知のように、城を中心に発達した城下町、寺社等による門前町、街道筋の旅人相手からの宿場町、さらに港を中心に栄えた港町など、いろいろあるが、なかにはそのいくつかが合わさった都市もある。歴史的に著名な都市などは、その名を耳にしただけで、その発生から発展の歴史まで想起したりするほどである。

平良のまちはさしずめ港町として発展したものである。日本列島の他の諸地域と異なり、縄文・弥生式文化の影響をうけることなく、もっぱら南方色濃厚な文化を展開してきたであろう宮古・八重山が、縄文文化と根をひとつにしつつも地域性豊かな文化を展開しつつあった沖縄本島の王権と公的交渉をもつたのは、大明洪武二十三（一三九〇）年だと「球陽」等の史書は伝えている。当時沖縄本島は三山鼎立の時代であり、浦添・

首里に拠る中山の察度王権と交渉をもつたのは、白川氏の祖・与那覇勢頭豊見親（惠源）と伝えられている。

はじめ真佐久とよばれていた与那覇勢頭の中山朝貢にさいしての船出の地は、平良市東北方の白川浜だという。「宮古島記事仕次」は、白川浜に祭壇をきづいて七昼夜祈願したところ、願明けの暁に、幟が東北方にたなびくことで、東北の地に大国あるを知って船出したと記している。

漲水泊（のち漲水港→平良港、現平良港第二埠頭一帯）が歴史の舞台に登場するのは、それからおよそ一世紀後である。一五〇〇年、八重山のオヤケアカハチらの乱平定にさいして、首里王府軍の先導役をつとめた宮古の支配者・仲宗根豊見親（玄雅）のころからである。

仲宗根豊見親はこの戦功によって、宮古での支配者としての地位を一層強固なものとし、併せて八重山への影響力も強めることができた。漲水の浜辺に面して宮古創世神話の縁起をもつ漲水御嶽を整備奉納し、その傍近くに「蔵元」なる政庁を設けた。はじめ仕上世蔵、船手蔵でいどであったが、のち中山との往来が繁くなるにもなつて次第に整備、拡充されていく。

慶長十四（一六〇九）年、琉球王国は薩摩・島津氏に侵略される。奄美は割譲されて直轄領となり、薩摩への貢租もはじまつて、対中国貿易まで事実上薩摩の管理下におかれる。かたちは独立国でも、実態は薩摩を介して幕藩体制下にくみこまれたのである。それにもなつて諸制度の整備がおこなわれる。王

府の宮古経営のあり方にも変化がおきる。

一六二九年からは王府派遣在番が常駐するようになる。はじめ一人、のちに二人、一六四七年からは三人になる。在番仮屋とよばれる執務場所兼宿舍が、いまの第一ホテルから県宮古支庁にかけて三棟並ぶ。左・右の両棟は東仮屋、西仮屋とよぶ。さらにその東に順次医者仮屋、学校所も設けられる。西仮屋のさきには貢布座、祥雲寺、権現堂、観音堂と並び、石畳道をへて蔵元、漲水御嶽、漲水泊となる。船着場を中心に諸官庁、寺社が立ち並ぶようになる。

くわえて船着場近くには船乗り相手の店―小屋も建つようになり、一帯は「クヤモー」（小屋毛）とよばれるようになる。近世末期から近代にかけてかなりの数が軒を並べるようになったのであろう。とくに明治十二（一八七九）年の廃藩置県以後は、国・県の役人のほか多くの商人も往来するようになり、風紀の面からも整備が必要となって、現在のイリ里一帯に一定地域を設けて料亭街や公設市場が開設された。

さらに商店街も形成され、現在の市場通りや西里通り、下里通りなど、大正期には早くも現在同様の姿をととのえていたようである。そのころには那覇に次ぐ県下第二の都市とよばれるほど、都市的形態をととのえている。

漲水泊一帯は大正三（一九一四）年、同十（一九二二）年の二次にわたる築港工事で埋立て整備され、漲水御嶽近くの突堤を第一棧橋、西よりの布干堂（ヌヌドー）に面した、パサマ近

くの突堤を第二棧橋とよび、両者を結ぶ範囲が漲水港とよばれた。

戦後、一九四九年十一月、二代め平良市長として公選、登場した石原雅太郎は二期八年の任期中に電気、水道、港湾の三大事業を推進するとともに、都市計画の基礎を策定された。現在の平良市の都市景観はこれまでみてきた歴史的展開の延長線上にすすめられているといえる。

◇港湾と空港を結ぶ町づくり

とはいうものの平良の市街地の戦後は、戦前の姿のままスタートしたわけではない。平良も、多聞にもれずさきの大戦では連合軍の連日の爆撃で焼け野原となった。ただ沖繩本島との違いは米軍の上陸がなく地上戦がなかったというだけである。現在の建物はほとんどすべて戦後のそれであり、コンクリート建てに至っては一九六六年九月の最大瞬間風速八五・三メートル、ついで一九六八年九月の同七九・八メートルの大型台風以後に建てられたものである。

このようにすっかり変貌したなかで、どのように現代の都市づくりに沿いつつ歴史的景観を回復するか。着手までには例え一定の時間を必要とするにしても、否、一定の時間を要するならばなおのこと、構想し将来像を公表すること自体は何よりも緊急事であろうと考えている。

およそ二十年近く前のことである。旧蔵元跡の敷地の東南側の石畳道はかつては祥雲寺の角の十字路まで伸びていたが、さ

きの大戦と戦後の道路工事によって、ほぼ三分の一くらい残して破壊されてしまった。港側から石畳道に向かって右手は郡農協敷地であり、左手は市有地で民間に貸与、複数の住宅が建っている。そのうち一軒が建て替えにさいして市の同意を求めた。

そのさい回答に当たって意見が二つに分かれてしまった。ひとつは市民生活を優先して即建て替えに同意する、いまひとつは周辺は古代宮古以来の貴重な歴史遺跡の密集地域であり、緊急に歴史ゾーン、市民の歴史散策通りとしての構想を明かにして建て替えるではなく現況の範囲内で内部改装に止どめるよう、協力を求めるというものであった。

すでに見てきたように、在番仮屋跡一带から、旧蔵元跡、漲水御嶽一带は重要な史跡の密集地域である。そこから今少し海岸沿いに右手にできれば仲宗根豊見親、知利真良豊見親の墓がほぼ建造当時の姿で並んでおり、さらに歩を進めれば真玉御嶽、ウブドウマリーヤの浜、ぶばかり石（俗に人頭税石）などどつづく。逆に左手の方、旧第二棧橋（現第三埠頭）の方へ行けば大立大殿のミヤーカーやツガ墓もある。

これらの史跡群を結ぶ基点が漲水御嶽であり旧蔵元跡である。石畳道はそれに沿っているのである。市の財政上、あるいは事業の緊急度合から、たとえ十年先、二十年先になろうとも史跡ゾーンの将来あるべき姿を示し、もとよりその間は市民生活との必要最小限の整合性をはかりつつ協力を求める、論点はこの

ようなものであった。

あれから早や二十年ならんとしている。平良市の市街地の歴史的形成に最も基点をなしてきた、この一帯の整備にそろそろ着手してもよいころではないか。この二十年近い間に周辺の歴史的景観はさらに変わりつつある。そのうえ港ターミナルの移転によって、人の流れも大きく変化しはじめた。

このままでは平良市はおろか、宮古の歴史を考えるうえで最も重要な歴史的遺産の集中する一帯から、人びとの足が、いや関心さえ遠のきかねない状況がはじまっている。

港ターミナルの立ち退いた跡の周辺の再開発について、歴史的景観の再現を基礎において考えてみることを、改めて提起したい。

◇むすびにかえて

平良港周辺の歴史的景観については、くり返し、述べてきたように、現在の県宮古支庁並びに平良市役所付近は、近世においては在番仮屋、医者仮屋、学校所の跡地であるばかりではない。近年の緊急発掘調査をとおして、十三世紀後半から十七世紀初頭にかけての遺跡―住屋遺跡としても広く知られるようになった。ひとところと異なり市民の関心も高くなっている。

この一帯から港へぬけて、北はぶばかり石から、西はツガ墓、大立大殿ミヤーカーにかけての周辺道筋に、人頭税の貢納布を検査し収納した貢布座跡、祥雲寺、権現堂跡、観音堂、石畳道、目黒盛豊見親ゆかりのインガー、蔵元跡、漲水御嶽、一連の国

指定史跡「豊見親墓」とつづいている。これらを可能な限り昔日の面影まで再現する。復元不可能なものはその所在地跡に図入り説明板を立て、参観者をして歴史の舞台にタイムスリップできるように配慮をする。

これら歴史的景観の範囲は地理的状況からみて、ただ歩くだけならせいぜい数十分以内に集中している。すべて散策コースとして位置づけられよう。

このような市役所周辺から港周辺にかけて歴史的景観の散策コースの延長線上に、サイクリングコースを設定したらいかがであろうか。ぶばかり石を過ぎると、浦島太郎伝説と同根の竜宮からルリ壺をみやげにもらった湧川マサリヤの御嶽がある。

ついで荷川取村番所跡、国指定史跡「大和井」をへて、アダンダキ井、県立少年自然の家、熱帯植物園、総合博物館、袖山浄水場、与那国の鬼虎の娘終焉の地、細竹井、地盛井、七原井をへて、旧海軍飛行場跡・現宮古空港を右手にみながら、ミヌズマ遺跡、久松みやーか群、中村十作真珠養殖場跡、ミニ通り池「ピキヤズ」、泰川大殿ゆかりの井戸（アマビザガー）、一八六〇年の落書事件で処刑された波平仁也恵教の処刑地である海水浴場・パイナガマまでくれば、もはや平良港第四埠頭であり、新港湾ターミナルやマティダ市民劇場等に隣接して、ツガ墓や大立大殿のミヤーカーが望める。

『宮古郷土史研究会会報』九九号、一九九六・一一・一一、

一〇〇号、一九九七・一・一八

9、「大立大殿ミヤーカー」

◇二大景勝地

地元二紙は八月二十八日、宮古島市教育委員会が「大立大殿ミヤーカー」を市指定文化財に指定し、告示したと報じています。同ミヤーカーの所在地に近いイリ里に生まれ、同周辺を遊び場にして育った者のひとりとしても、この上ない朗報です。

同ミヤーカーは下里通りから平良港の臨港道路を抜ける交差点に近い、かつて「ヌヌドー（布干堂）」と言われた景勝地に位置します。もともと戦後六十余年、とりわけ一九七二年本土復帰後、急速に進む大型開発行為でミヤーカーはもとより、周辺風致も大きく変貌してしまいました。ミヤーカーの特徴である外郭の列岩はなくなり、墳墓を被う一枚岩も割れ、原型を著しく損なっているようです。そのうえ市街地近辺で、「マイヌモー」（現宮古神社一帯）とともに二大景勝地として知られていた一面緑の芝生のヌヌドー周辺は埋め立てられて景観は一変してしまいました。臨港道路に結ぶ重要な拡幅工事ゆえミヤーカーも消滅するのではと懸念されただけに、文化財指定による保護措置は英断といえましょう。

◇大殿と空伝

宮古旧記類や「家譜」等によれば、大立大殿は十四世紀末、

ちゅうざん

中山（のちの琉球王国）に朝貢し、宮古に平穩と富をもたら

した与那覇勢頭豊見親の孫で、その後を継いで宮古の首長となつた人物と言われています。父泰川大殿は壮年のころ、「伯牛の病」で、ピキヤズ付近に隠棲して長命したと伝えられています。

ある夜、屋上に福木が生えて数百丈の大木となる夢を見て、善子をささがる瑞夢と占い、夫人を招いて夫婦のまじわりをする、果たせるかな生まれた子は長じて宮古の首長となり、大立大殿と尊称されます。

大立大殿はとある日、大勢の供を連れて、通尻（ピキヤズ？）に「白繩の慰（漁）」に向く途中、我が初物（ニンニク）を奉らん、という童に出会います。風貌非凡にして、言語さわやか、幼にして大人の風ある童の所作に感じ入った大殿は、「空広」と名乗る七歳のその子を同行します。この日はことのほか大漁で、大殿は魚玉（配分）を空広に一任します。その手際によきに一層感服した大殿は空広を手許に引き取り養育します。この童こそ長じて「宮古中興の祖」と讃えられる仲宗根豊見親だ、というものです。

◇「ミヤーカー」の上の…

近代に入り、市場、西里、下里三通りを中心とする平良の市街地は、那覇や県外からの「寄留商人」らによって商店街、市場通りから海辺に至る一帯には料亭街が形成されます。料亭街の東一帯に当たる広大な区域が、かつての大立大殿の屋敷跡と

伝えられています。ミヤーカーはその西方海辺に面しての造営で

す。昭和初期ごろまでほぼ原型を保ち、イリ里をイリ里たらしめた料亭（サカナヤ）街華やかなりしころ、料亭「春の家」の故池間昌祥（明治三十年生）は、「子どものころ、大人たちはミヤーカーに腰をおろして、伊良部島に沈む夕陽を眺めながら昔話にふけり、夕涼みするのが常であった」と回想していました。在郷軍人会の役員で、昭和初期、平良町（当時）職員として町有林の大野山林や袖山の管理に従事していた故仲宗根栄吉（明治三十五年生）も同様の話を聞かせてくれたものです。もとよりお二人とも生粋のイリ里人です。

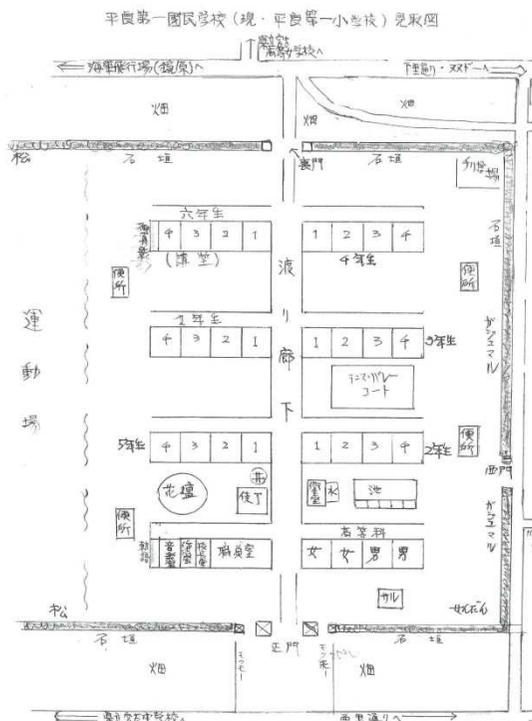
ミヤーカーの所在する芝生のヌヌドーには、電柱は一本もない。子どもたちにとつては、鬼ごっこ、駆けっこ、相撲など最高の遊び場であり、正月をはさむ冬休みには終日凧上げに興じる場所でした。

◇写真付き説明板を

市指定文化財として標識や説明板を設置するさいには、可能な限り原型をしのばせる写真も焼き付けて、そのかみの面影を周知させていただきたい。与那覇勢頭豊見親から大立大殿へて仲宗根豊見親に至るほぼ一世紀、宮古の「自立」した時代であり、「宮古郡民性」の基礎を培った時代を反映していると思えるからです。

『宮古毎日新聞』二〇二二・九・二七

10、平一小の石垣と樹木等



「平良第一小学校」が市役所の位置から現在地へ移転したのは、一九三二（昭和六）年五月～三二年十月にかけてである。それからほぼ十年後の一九四一（昭和十六）年四月に入学した一九二九（昭和四）年四月月以来の「平良第一尋常高等小学校」が、国民学校令で「平良第一国民学校」と改称されて、最初の一年生である。保育所のない時代、幼稚園にも通わなかった身には、平一小は生まれて初めて集団生活を体験した記念すべき学校でもある。

正門は北側に面し、県道から少し奥まった位置にあった。登下校時でも児童の通行は許されず、誰からともなく先生方と来客用だそうなのという声が聞こえていた。裏門は南側にあったが、なぜかここは常時閉ざされていた。このため児童の通用門は西側の一か所だけで、現在の正門の少し北寄りの位置にあった。

校舎は校地のほぼ西半分、東、西に木造平家建て瓦葺で各四棟。中央は南北に柱と屋根だけの渡り廊下で結び、どの位置からも正門と裏門が見えていたような記憶である。東側半分は二〇〇メートルのトラック付き運動場である。校地の四囲で直接道路に面しているのは西側だけで、北側の正門から、西里通りの延長戦上にもびる県道までは、畑の中をモクモウ並木、東側はサトウキビ畑、南側は同じく畑（イモ畑？）をへだてて、下里通りの延長戦上にもびる新里への県道をのぞむ位置にあった。

校地は堂々たる石造の通門付き正門をはじめ、全体石垣で囲われていた。愛知県出身の二代め校長・天野春吉は、築造にさして自ら先頭に立って土工を指揮していたという。一九三〇（昭和五）年二月～三六年三月まで六年間勤務しており、現在の平一小の基礎はこの時期にきずかれたといえよう。移転当時、平一小訓導であった故山内朝保は生前、天野校長は、天気の良い日は「アマノハルキチ」、雨の日は「アミノフルキチ」といって、職員から敬愛されていた、と語っていた。

正面左手から運動場を囲う東側石垣の内側には児童の背丈を

こすていどの松が密植されていて、隠れんぼにはもつてこいの場所であった。また、西側（現在の正門沿い）はガジュマルがかなり生育していて、木登り遊びに夢中にさせた。これらの樹木は、三代め平良彦一、四代め池村恒章校長らの時代をとおして、モクモウは卒業生が卒業記念に、また松は五年生以上の児童が植えたものである。元々岩盤を開削しての校地だけになかなか定着せず、在校生が補植したり、水道のない時代、毎日水を運んで世話をしたという（本永透「創立八〇周年によせて」）。これからすると石垣やガジュマル等は少なくとも六十数年の歴史をきざんでいることになる。

現在、平良市立の小学校で、戦後開校した宮原小や宮島小、あるいは復帰後の南小や東小を別にする、開校当初どころか戦前からの記念すべき形あるものを残しているのは平一小以外ないように思われる。強いてあげれば元池間小の「奉安殿」跡くらいであろうか。

平一小とて先の大戦中は、沖縄県に展開した第三十二軍の先島集団司令部軍医部に接收され、戦火を浴びて校舎のすべてを失ったが、かろうじて石垣とガジュマルだけは昔日の面影を止めていた。しかし最近の報道では道路拡幅工事のために、記念すべき石垣や樹木に何らかの変動がおきそうな気配である。

伝え聞くところでは、集中雨等にさいして現正門前道路の排水悪く往来に難渋しているのは事実のようだが、ふだんはさほど問題はないという。それならば学校周辺の排水を平良中横の

下水路に通ずなりして、さらに北側の本来の正門も往来できるよりにすれば、排水はもとより、登下校時の往来の安全も現状よりは改善するのではなからうか。

すでに文化財指定の条件をもつ石垣やガジュマルを保全する観点で、学校はじめ市当局、周辺住民のいつそこの熟慮を期待する次第である。

〔宮古新報〕一九九九・七・二二

11. 「西里通り」

過日、西里通りの「華ギャラリー」で、西里通りの活性化に向けてのシンポジウムが催された。仲本正雄、野村安潤のお二人から戦前・戦後の西里通りに関する回想談があつて、引きつづき参加者による西里通りにまつわる思い出話に花が咲いた。仲本さんの戦前の回想談を聞きながら、おそらく氏よりは一まわりも後であろうが、幼少時の西里通りの記憶が走馬燈のようによみがえってきた。

◇人口十万人都市の景観

古琉球以来、宮古の中心をなす平良のまちは、平良港を正面にして、明治中期以降の人頭税廃止前後から郡（県）外から移って来た多くの「寄留商人」によって、市場通り、西里通り、下里通りの三通りを中心に商店街が形成された。その北寄り一

帯に各官公庁や学校、南寄りには旧下里村番所跡に公設市場、港近く西側一帯には料亭街が形成されていた。人口数万人の宮古で平良のまちの景観はさながら十萬都市をしのばせ、那覇につぐ県下第二の都市と自他ともに公称されるほどに発展していた。もつとも今と違い車の往来は稀であった。

三通りともに未舗装の「ナウサンツ」(道＝コーラル)ではあったが、両側軒を越すガジュマルがおい茂り、夏場は灼熱の陽光をさえぎって、農村から往来する人びとの馬の手綱をつなぐ、かつこの並木をなしていた。

食糧品、衣服、日曜雑貨、そば屋、酒造、菓子屋、書店、理髪店、薬店、履物店、金物店、自転車店など、人びとの暮らしに必要なものは何でもそろっていた。西里通りと市場通りの交さする十字路の北西寄りの角は、宮古自動車株式会社(通称「丸宮バス」)があつて、東へ左側二軒め辺りが山小百貨店、その斜め向かい現在の琉球銀行の位置に山田百貨店、その東隣りは砂川酒造(「ジンカ」)、その裏の小道に面して銭湯、道をへだてて養豚場。さらに東へ行くと、中央通りと交さする十字路の角、今の「ココストア」は渡辺商店で、ここは戦後間もなく高原医院であつた。さらに東へ数軒先には南へ抜ける小道の三岔路である。この小道の西側一帯は、中央通りまで旧西里村番所跡である。小道に面した東側は中央市場があつて、生鮮食料品を扱うほか、本屋もあつた。戦後は、映画の常設館「平和館」に変わっている。西側の現在「しきしま」辺りは、盛島医院、南側

は、道をへだてて上里医院である。

◇地下に防火用水タンク

西里通りはさらに東へ行くと、右側は中尾酒造、左側には大野商店があつて、ここの書籍部は宮古のすべての学校の教科書を一手に扱っていた。「少年倶楽部」や「講談社の絵本」などの雑誌も扱っていて、児童生徒にとつてはあこがれの店であつた。戦後は、三階建ての「あかみね会館」ができて、三階のホールでは結婚式の披露宴や「文春講演」等があつて、一九六〇年代の本土復帰前に山岡荘八、司馬遼太郎、岡部冬彦らが講演している。現在の海邦銀行の位置である。その東のレストランのむらは「野村酒造」で、裏には直径五メートルはあるという足踏み的大型水車で井戸から酒造用の水を汲み上げていた。さらにその裏には銭湯もあつた。

その東の十字路「アカンミユマタ」(赤嶺四辻)の手前、現在の盛島薬局の前辺りと、山小百貨店の前の二か所には、地下コンクリート製の水タンクが造設されていた。それぞれ長さ四メートル、幅三・六メートル、深さ三・三メートルで、容量四五〇石(二万五二〇〇リットル)、工事費一五〇〇円は民間有志による寄附で、一九三三(昭和八)年十一月五日竣工している(『平良町制施行十周年記念誌』一九三四年)。

当時は三通りの商店ばかりでなく宮古の家屋は大方瓦葺きか茅葺きで、コンクリート建ては一軒もなかったせいであろう。もとより上下水道普及以前のことであり、火事に備えての防火

用水タンクである。

◇映画館と芝居小屋

市場通りと交さる十字路の角の「丸宮バス」からさらに数軒西へ進むと、左側には戦前宮古では唯一の映画常設館「新世界」があつた。経営主は「野村酒造」と言われていたが、当時は映画館とはよばず「活動写真」というのが一般的で、時には無声映画も上映され、「活弁」とよばれた弁士がイリ里に住んでおられた。新世界の向いの角はアイスケーキ屋で、映画上映の合い間には抜け出てアイスケーキを買う客が行列していたものである。

その前の坂が「親越（ウヤグス）ヌ坂間」で親は役人のことであり、近代初期まで現在の共和ホテルの一带にあつた「蔵元」詰めの役人たちが往来する坂ということから来た呼称のようである。坂を下るさい右手に見えてくるのが、一八七六（明治九）年建立のドイツ商船救助ゆかりの「博愛記念碑」である。その前方、港の方へ延びる小道を進むと、右手に材木の倉庫を改装した芝居小屋が賑わっていた。劇団はすべて那覇からの出張公演で、地元向けに「仲宗根豊見親」の活躍を脚色して上演したりしていた。「ナーグスク・ヌ・デブ」の愛称で親しまれていた宮古在住の故名城政助が「ヨーロッパからヒロツパに行つて……」などの漫談で観客は爆笑のウズであつた。

◇時間制限の「歩行者天国」

七十余年前、イリ里から平良第一国民学校（平一小）への登

下校は通常「凱旋通り」であつたが、午後の授業の場合、時には西里通りを往来することもあつた。当時の家並みの光景は今も脳裏に焼きついている。通りの活性化の一つに「歩行者天国」はどうであろうか。車の往来を時間制限すれば歩行者は安心して歩行も買物もたのしめる。それには「通り」全体でスーパードコンビニのように何でもそろっているということが求められよう。

『宮古郷土史研究会会報』二〇一号、二〇一四・三・一一

12. 図書館との出会い

図書館の存在を知ったのは、国民学校（現小学校）低学年のころである。とはいっても当時はただ傍を通っただけで、利用したわけではない。平二小（現北小）に隣接する宮古支庁の裏に木造瓦屋根平家の宮古図書館はあつた。休日に「ンマ大将」にしたがつて、裁判所の茂みに群れをなす小鳥を捕えに往来しながら、トンビヤン（龍舌蘭）の密生する石垣沿いの窓越に眺めるだけであつた。

そのころ平良のまちには西里通りに面して、大野書店という教科書も扱う大きな本屋があつた。平良で、否宮古で唯一の本屋ではなかったろうか。級友のなかには時折り学校に「少年倶楽部」などの雑誌を持ってくるのがいたが、「のらくろ一等兵」

とか、「冒険ダン吉」などのマンガが一〜二頁でいどのつていた。皆でうらやましげに肩越しにのぞきこんだものである。

図書館にもこんな面白い「本」があるだろうか、と思うこともあったが、どういうわけか図書館は出来のいい子が入りする所なのだ、と思いきんでいたように思う。「沖繩戦」必至の状況で、南九州に疎開したが、疎開先の国民学校の隣りにも公共図書館があった。利用することもないまま、日本の敗色濃い八月十一日夜、学校も図書館も周辺民家の大方も、米軍の大空襲で灰尽に帰した。

敗戦後しばらくして、新制中学の初めての一年生として入学したころ、焼け跡のバラック住居にまじって本屋も一軒誕生した。下校時、時々そと立ち読みしたが、「少年クラブ」などにまじってマンガもあった。手に取って驚いた。確か主人公は大きな大学生の角帽をかぶった、あどけない少年で横山隆一描く「フクちゃん」といったのではなからうか。薄っぺらとはいえず、表紙の次の頁から最後までマンガなのだ。生まれて初めてみるマンガばかりの「本」、すごいなと思った。ぜいたくに思え、一瞬大丈夫なのだろうか、とさえ思った記憶は今も鮮明である。何しろ寝てもさめても、「軍歌」と、「ぜいたくは敵だ」「欲しがりません、勝つまでは」「鬼畜米英撃滅」等々のスローガンの中で暮らしていたのだから。マンガばかりで一冊の本が出来ているなどと信じ難いことであった。

二浪して入った高校では図書館を教室のように出入りした。

それまでの無為に過ぎた時間を取り戻すかのように……。伊波普猷を知り、その著『古琉球』を初めて手にした。同じころ山之口猷の詩集『思弁の苑』も知った。著作物から入ったというより、肩書きにひかれたのではなかっただろうか。伊波は沖繩県出身初の東京帝国大学出の言語学者であり歴史家であると同時に、中学の教科書で習ったアイヌ語の金田一京助に一期先輩、猷は同じく沖繩県出身で、教科書にも出る佐藤春夫や金子光晴、草野心平らの詩人と交友関係をもつ詩人であることを知った。名前を知ってから著作物に分け入る形での読者であった。日本国内で他に類のない、地域性豊かな歴史と文化をもち、それゆえに時として、そこは異国（外地？）ではなからうかとみなされることもある、琉球・沖繩史への導入であった。

帰郷後は慶世村恒任の『宮古史伝』や稲村賢敷の『宮古島庶民史』に出会い、砂川明芳氏からは生きた宮古史の考え方を教わった。琉球・沖繩史のなかでも宮古は人口数万にすぎないが、又ひとときわ地域性豊かな歴史と文化をもつことを気づかされた。ことさら言うまでもなく、「日本国」の歴史そのものが、本来北海道から沖繩県まで同時出発したわけではない。陸つづきで交流が密になるほどに共通性は濃く、政治や文化の中心とみなされる所からは遠く、山河や島ごとに区切られる疎遠なほど共通性は希薄になる。さらに中央権力にとつての重要（利用）度の当否にも大きく左右される。それゆえあえて「単一」などと一くくりにしようとするとところにうさん臭さがつきまとう。大

局的には「ヤポネシア論」に行きつかざるを得ないのが、南北三千キロもある、この列島の歴史の必然性であろう。

過日、平良の中央公民館で開かれた図書館関係研修会の準備をしつつ、十代での図書館との出合いが今日につながっていることを今さらのように思い描いていた。「日本国」は再び戦争する「大日本帝国」へ戻りたいのであろうか…。

『宮古毎日新聞』二〇〇五・一二・二八

13. 「志高い」先人たち

宮古初の「医療史」が二〇一一年十一月、(社)宮古地区医師会によって刊行された。多少とも関わったものとしてはいささか手前味噌になるが、宮古の医療史上特筆すべき快挙であろうと考えている。

◇己の身を削って

構想から二十数年の歳月を経ているようだが、最後の一年間はほぼ毎週のように編集会議が開かれている。池村真会長はじめ、数名の医師が一日の診療を終えて夜、医師会事務所に集まり、お茶と駄菓子だけで原稿の点検など、編集作業に当たっている。席上、ことあるごとに話題にのぼっていたのが、「先輩方の志の高さ」である。

宮古には現在、百名内外の医師がおられるようだが、大戦後

のある時期まで十名内外、多いときでもせいぜい二十名ほどであった。数少ない学識者として、日ごろの診療の傍ら、地域社会各界の求めるままに、医療以外のさまざまな分野で活動しておられる。

余りの多忙さからであろうか、当時の医師の大方は六十歳を待たずして、その生涯を閉じておられる。

「医者の不養生」という言葉があるようだが、現実是不養生などでないのは明白である。郡民の診療に従事しながら、その間に求められるままに己の身を削ってさまざまな社会活動に従事していたのである。

こうした献身的な活動を知るに及んで、「医療史」に関わった医師たちをして、畏敬の念をこめて「先輩方の志の高さ」と、言わしめたのであろう、と受け止めている。

◇幅広い活動領域

二〇一二年、宮古島市が刊行した『みやこの歴史』には、古琉球から現代まで、さまざまな分野で活躍した多くの人物が登場する。

宮古が遅れて近代を出発したせいでもあろう、これらの人々も大方専門の領域にとどまらず、他のさまざまな分野に足跡を残している。

例えば明治期から昭和初期に知られた立津春方は、宮古出身(平良・西里)で初めて東京高等師範学校(現筑波大学)を出た教育者だが、啓蒙家・宗教家・政治家として幅広い足跡であ

る。晩年は、交通機関の未整備のところとあって、平良から毎月徒歩で宮古南静園に通い、入園者に法話を説いている。

また、宮古出身（下地・洲鎌）で初めて長崎の医学専門学校（現長崎大学医学部）を出た盛島明長は、医師であるばかりでなく、宮古郡織物組合長として、宮古上布の品質向上、販路開拓などに尽力している。県会議員・国会議員にも選出され、宮古高校の前身である旧制の宮古中学校や宮古高等女学校の創立にも大きく関与している。

◇民衆に支えられて

近代宮古は、このような優れた指導者・組織者を輩出させている。当然のことながら、志高く、優れた指導者の背後には圧倒的多数の名もない人びと、民衆がいることも見落としてはならないであろう。彼らに依拠しての指導者である。

昨秋、若者たちが催した復帰四十周年記念シンポジウム「宮古のアイデンティティを求めて」を傍聴しながら、現在の宮古の基礎を築いた有名・無名の志高い先人の苦闘の足跡を回想していた。

二〇一三年もたゆむことなく新たな歴史が紡ぎ出されていくことであろう。

『宮古毎日新聞』二〇一三・一・一一

第四部 「自立」した宮古

1、琉球歴史回廊・南北文化の接点

宮古・八重山の、いわゆる南部琉球は日本列島のなかで唯一、縄文・弥生文化の影響をうけていない地域である。このためその先史時代は、奄美・沖縄諸島などの北部琉球の編年とは異なり、「先島編年」と仮称されている。前期・後期に区分され、前期はおよそ三千数百年前から二千数百年前、後期はそれ以後、およそ一千余年をへて、ひきつづき地域性を保持つつも十二、三世紀ごろ沖縄グスク時代へと、南北一つのまとまりをみせている。

◇源流は東南アジア

先島先史の特徴は前期が有土器、後期は無土器だという。源流はフィリピンなど東南アジア諸地域に求められるようである。それでいて南北琉球に共通するスイジ貝やサメ歯製品なども出土している。有土器から無土器への変遷は、同一系統集団の連続説と、後期は別集団による文化の展開との両説がある。

宮古に限っていえばいまのところ前期遺跡は、多良間村の添道遺跡の二カ所。後期は、城辺町の浦底遺跡と長間底遺跡の二カ所で、二千数百年前から一千九百年前ごろとみなされている。

その立地条件から今後も宮古島東北部から東部地域の海浜沿いに確認の可能性が指摘されている。

浦底遺跡からはシャコ貝製の貝斧が二百余点もでて、関係者を驚かせている。なかには未完成品も少なからずあつて、視察にみえたフィリピンの研究者をして宮古に貝斧製造工場があつて、フィリピンにも輸出していたのではと、話題をまいたほどである。

◇柳田国男と宝貝

日本民俗学の祖・柳田国男の晩年の著書『海上の道』は、原始日本人の祖先がはじめて日本列島にその足跡をしるしたのは、宮古であろうと想定している。宮古に漂着した一群の人びとは、北方に広がる大礁原・八重干瀬やへびしで無尽蔵に産する宝貝を発見した。当時大陸では宝貝は貴重な通貨であり、これらの人びとは宝貝を大陸に運ぶことをなりわいにするようになった。そうした銅貨が登場するに及び、稲作の適地を求めて島伝いに北上していった、というものである。

その後、稲作渡来のルートや宝貝の産地の調査、研究が進むにもなつて、柳田のロマンにみちた壮大な日本人渡来の仮説はくずれている。しかし柳田が考えた人の移動にかかわる有視界航行、あるいは漂着にまつわる着想は軽視できないものがあ

ろう。九州から南下した人びとが沖縄本島までたどりつき、また、同じく季節風や潮流を利用して島伝いに北上してきた人びとが宮古までたどりつく。両者の出会いは三百余キロメートルの大海で長く阻まれていたが、十二、三世紀ごろ琉球王国の形成期、グスク時代に入つて繁き往来となり、一つの琉球文化圏を形成していく。いわば宮古は南北文化の接点ともいえる地域であろう。

宮古の地理的特性をあらわすのは歴史ばかりではない。宮古諸島を形づくる八つの有人島すべてが隆起サンゴ礁の島で、標高ほぼ百メートル以下である。それゆえ深山幽谷はなく、地表を流れる川もないかわりに地下水は豊富である。それを活用して世界最大の地下ダムの建設がすすめられている。どの島も毒蛇ハブは棲息せず、四季を問わず深夜、あるいは雨天であっても、どこへでも安心して踏み込める。加えて九月初めの白露の季節にはアカハラダカ、十月初めの寒露の季節には古くからサンバの休息地として知られている。旬日余にわたつて、平地で大群の渡りを見ることが出来る日本列島唯一の観察場所である。

◇豊穰祈る村々の祭り

十二、三世紀以降の人びとはこうした地理的、自然的条件をいかして、うりがー（洞井）を中心に住みつき集落を形成してきた。平良市教育委員会が先ごろ刊行した『平良市史』第九巻（御嶽編）には、宮古全域でおよそ九百近い御嶽（拝所）が収

録されている。御嶽では村（里）人にかかわる各種祭祀が年間をとおして催されている。人びとは御嶽の神々のなかで安らぎを求め、命とくらしの安全をはかりつつ歴史を積みかさねてきたのであろう。そのことは祭祀とともに伝わる多くの神歌によってうかがうことができる。

狩俣・島尻・大神のウヤガン、池間・西原・佐良浜のユークイやミヤークツツ、宮国・来間などのンナフカ、来間のヤーマスプナカ、砂川・友利のナーパイ、島尻・野原のパーントウ、仲筋・塩川の八月踊りやスツウプナカ、そのほか五穀など作物の豊作、航海安全、家族の無病息災等を願い、あるいは感謝の神事が各集落（主として字単位）で催されている。多いところでは年間数十回も催されるという。

神事には神歌がうたわれるばかりでなく、集団舞踊のクイチヤーや獅子舞い、棒振り、笠踊りなど、多くの民俗芸能が奉納され、互いに歓を尽くす。なかには非公開の秘儀もあるが、多くは公開されている。

こうした宮古の地理的・自然的特性のなかで、神事に根ざして形成されたゆたかな歴史―各種催しやその舞台でもある御嶽等の文化財が、地域づくりりにどうかされるか。あるいは新たな歴史形成にどう位置づけられるか。一九七二年五月の「祖国

復帰」後、怒濤のように押し寄せ、今なおつづく大型公共工事との整合性はどこまでかはれるのか。国・県・市町村等の行政当局はもとより、地域住民すべてに負わされた課題であろう。

◇開発ストップの運動も

土地改良や交通機関整備の美名のもとに、小なりとも見なれた各地の丘や御嶽林が消えさる。平たんな島がいつそう平べったく単調になる。先人のたゆみない努力で造成されたアダンやユウナなど地域性ゆたかな樹種の防潮林がなぎ払われてコンクリート護岸に変ぼうする。そのうち防潮には不向きと撤去して階段護岸に変わる。サトウキビ畑に突如として舗装道路が新設され、そば近い古い道路は県道で、新設道路は農道だという。工事そのものが目的化しているのではないか、との批判がでる所以である。

ともあれ自然や文化財との整合性を求める声が、闇にくぐもっているわけではない。漁（農）民や自然保護団体等が中心になって、与那覇湾の淡水湖化や大野山林内横断道路の新設をやめさせた事例もある。近年には、平良、城辺、下地、上野四市町村民全体の生活用水源である白川田水源地近くのゴルフ場をふくむ「ラ・ピサラ計画」をやめさせた。県外大企業による開発計画で、水源汚染への懸念が選挙の争点ともなり、反対側が

勝利するほどの関心の高さをみせている。

また、ハード面ばかりではなくソフト面、多くの各種イベントも取りくまれてはいる。ドイツ商船遭難救助百年、人頭税廃止八十五年、同請願百年、柳田國男ゆかりサミット、サシバサミット、プロヴィデンス号来航二百年記念祭等々の事業を通じて、関係国（自治体）と親善・友好関係を深めている。なかには「うえのドイツ文化村」のようにハード、ソフト両面から地域おこしにいかしている事例もある。

さらに全日本トライアスロン宮古島大会やプロ野球のキャンプ地などは県内外ばかりでなく、海外までに宮古の名を広めている。一九八五年四月、申し込み三一〇人、出場許可二四八人ではじまったトリアスロン大会は年々参加者数、参加国もふえ、本年四月の第十四回大会では、申し込み三〇一四人、出場許可一四〇〇人、全国四十七都道府県はすべて、海外は十六カ国にのぼっている。取材陣は県内外から四十五団体、三十四人。大会を成功させるためのボランティアは、医療班をふくめて第一回の三七八七人から年々ふえて、第六回以降はつねに四八〇〇人をかぞえる。主催者が「世界一安全な大会」を自負する所以である。

それゆえ選手とボランティアやホームステイによる家族との継続的な交流も高い評価をえている。同時にこうして蓄積された知恵や情報が、必要とされる生活基盤や産業基盤等の整備に、どれほどいかされているのかが問われつつづけているのも確かである。

ある。

◇史跡や自然の拠点

「琉球歴史回廊」を宮古に即していえば、六市町村ともに当該地域のメーンとなる施設、イベントなどは一応創出、あるいは整備されつつある。ふるさと民俗学習館・八月踊り・シュンカニ大会（多良間村）、トーガニ大会（伊良部町）、ドイツ文化村・みやこパラダイス（上野村）、サニツ浜カーニバル（下地町）、海宝館・太陽光発電・地下ダム（城辺町）、総合博物館・マティダ市民劇場・風力発電（平良市）など、きわめて多彩である。加えて八重干瀬、東平安名崎、与那覇前浜、砂山、通り池、佐和田の浜などの宮古の誇る景観がある。また、数多くのうりがー（洞井）やミヤーカー（墳墓）をはじめ、大和井、トウユミヤ墓、上比屋山遺跡、遠見跡など、宮古ならではの史跡も多い。

◇我が故郷の誇り

これら施設のいっそうの充実、史跡等の周辺風致をふくめた整備をはかるとともに、御嶽や集落の公開可能な祭祀並びに自治体の各種イベント等を、宮古圏域として年間をとおして通観し、一巡できる整備がのぞまれる。

それには宮古全体を地域性ゆたかな総合博物館としてとらえる必要がある。そのうえで六市町村の連携のとれた案内板の設

置、順路の整備、ガイド（語り部）の養成、さらにこれら一連の作業を支える人材の育成と、そのネットワーク（組織）も必要となる。

宮古圏域の人びとに愛され支持される「琉球歴史回廊」として光り輝かすことが可能ならば、心ならずも遠く異郷に住む郷友も「宮古は我が故郷」と、他に誇れるだろうし、ひいては郡（県）外はもとより、海外でも興味と関心をひくのではなからうか。

『琉球新報』一九九八・一〇・一四、一五

2、宮古史の自立的展開

敗戦直後のドサクサのなか、南九州の疎開先へ小さな漁船で密航までしてきた父とも頼む叔父ではあったが、時節柄定職はなかった。浜辺の塩焚き場で塩を買って農村へ出向いて米にかえ、さらにその米を市街地へ運び闇市で金にかえた。こうしたささやかな利ざやで雑穀やサツマイモを買って一家六人かろうじて糊口をしのいでいた。

そんな暮らしであったが、世の中はいつか落ちつくときがくる、その日のためにとにかく学校はつづけよ、という叔父が、ふっと思い出したように口にするのに、伊波晋猷と山之口貌の名があった。沖縄県を代表する学者であり、詩人だということ

ではあったが、叔父もそれほどくわしく知っているようではなかった。

高校に入って公共図書館を利用するすべを知ったころ、世は朝鮮戦争の真最中であった。単独講和か全面講和か、の激しい論議が落ちついたころには、メーデー事件、ビキニ水爆被災、MSA協定など、キナ臭く騒然たる世相であった。

そのころ初めて伊波晋猷の『古琉球』、ついで『山之口貌詩集』を手にした。通俗だが、まさに脳天を鉄槌でうたれたような思いであった。疎開先に沖縄県出身者は他に誰れ一人いない。沖縄方言の片言さえ聞くこともなく、すっかり忘れて過ごしてきた十年近い歳月を、今さらのように振り返ることになる。

一度沖縄へ帰ろう、宮古へ帰ってこよう、と考えるまでにはさほど時間を必要としなかった。三か月のつもりが体調をくずし、さらには様々ながらみにぶつかり、ずるずると滞在を長引かしているうちに今日になってしまった、といえようか。「身分証明証」を「南連」に送り返して一年、二年と過ぎていく。その間、暇さえあれば沖縄史をあさっていた。しかし率直にいうと、読後感はいえは「皇国史観」とはいわぬまでも、王統中心の思いが強かった。首里・那覇を中心にした歴史展開であり、宮古・八重山をはじめ国頭等の地域はみえず、国の基たる農民不在の歴史だと思ったものである。

こうした釈然とせぬ思いのなかで出会ったのが、稲村賢敷の『宮古島庶民史』であった。一九五七年夏ころであったらうか。

歴史展開の舞台が宮古に限定されていることへの新鮮さとともに、大陸をはじめ各地域とかかわっていることを示しつつも、日本本土はおろか沖縄本島とも異なった歴史と文化をもつ時代、いわば宮古独自の世界への開眼であった。

琉球王朝成立以前、宮古が自立し、いわば力量相応に中国大陸をはじめ周辺諸地域と交渉をもち、王朝成立後も主体性をもつてかかわっていたであろうことを知ったのは、新鮮な驚きであった。十四〜十六世紀初頭にかけてのおよそ二世紀の間、宮

古は自らの統率者を『豊見親』^{トウケンシヤ}（響動む親トウキョウムシヤ名高い指導者）と

尊称した、そういう時代である。のちに、この時期の評価をめぐって、著者と下地馨先生との間で県紙上「倭寇論争」が展開されたのは周知のとおりである。

当然のことながら琉球弧の島々は共通の部分をもちつつも、それぞれ地域性ゆたかな歴史と文化を展開していた。いわんや南北三〇〇余キロメートルにおよぶ日本列島の大小の島々が、均一で同質の歴史や文化を展開してきたかのようには思い込んできた日本史像を根底から考え直させるきっかけになったといっても過言ではない。

当時著者の稲村先生は六十二歳、琉球府立宮古図書館長の職にあった。平良区立北小学校の正門に入って直ぐ左手に、米軍払い下げの俗にカマボコ兵舎とよばれた小さなコンセツトを転用しての図書館で、職員は館長のほか一人だけであった。

稲村館長は調査に出歩かれるのか不在がちであった。しかし在勤中はいつも机に向かって書きものをしておられた。開放された入り口からは校庭ではしゃぐ子どもたちのざわめきが飛び込んでくるが、まるで意に介さぬ様子であった。それから四年後、図書館長を辞して那覇へ転居され、その間、直接ことばをかわす機会を得なかった。さらに十余年後、那覇市史編集室の嘱託として小禄支所二階の一隅で、ひとり家譜の解説、執筆をしておられるとき、お目にかかり、ようやく積年の思いを申しあげることができた。先生はなお若者のような情熱をこめて、宮古の個性ゆたかな歴史について語り、年若い宮古のために働けないことをくり返し申し訳ないと言っておられた。

いまや考古学をはじめ諸学問の成果は、宮古・八重山の先史時代が縄文・弥生の文化を経験していないことを明らかにしている。同時に日本列島そのものが海をへだてた大陸と様々な私たちで対応してきたことも知られるようになった。太平洋側と同様で、潮流と季節風を抜きにしては何も語れない。もはや日本列島の歴史や文化を画一的にみるものが如何に当を得ないものであるかを教えている。それぞれの地域は相互に関係しあいながら、その地域の拠って立つ歴史や文化を背景に、個性ゆたかにその地域を主張している。

とりわけ沖縄県はその地理的条件から各地の文化が交流し、醸成されてきたことを教えている。我が宮古もその重要な一端を担っているのである。今年伊波晋猷の名を教えてくれた叔

父の十三回忌、さらに二年後には宮古→沖縄の歴史をアジア的
広がりのなかで考える端緒を開いてくれた稲村先生の生誕百年
を迎える。

『新沖縄文学』九一号、一九九二・三・三〇

3、教科書にのった宮古

◇三つの「事件」

近代宮古の出来事で日本史上に登場し、教科書にも掲載され
て広く知られている事件が三つある。「台湾遭害事件」「博愛記
念碑」「久松五勇士」である。

遅れて近代を出発した明治国家日本が、欧米列強に追いつく
ために、「殖産興業」と「富国強兵」を二大基本政策に、帝国主
義国家として成長していく過程に利用された事件である。

◇台湾遭害事件

一八七二（明治四）年、首里王府に貢租（穀物と織物）を納
めて帰途についた宮古船が、逆風にあつて台湾東南岸に漂着し、
乗員六十九人のうち五十四人が現地先住民に殺害された。その
報復のために近代日本初の海外出兵となった事件である。琉球
国→琉球藩→沖縄県へと至る「琉球処分」を早める契機となっ
たばかりか、さらには「分島問題」にまで発展した事件として
知られている。

「琉球処分」は一八七九（明治十二）年、琉球藩（国）を廃
し沖縄県を設置したことで、一般に「廃藩置県」とよばれてい
るが、軍隊と警官隊→強権による併合である。その上、琉球国
と冊封関係にある清国（中国）から抗議されると、一転して今
度は、沖縄本島は日本、宮古・八重山は中国とする条約案に同
意してしまう。国家権力のご都合主義のよき見本といえる。

◇「博愛記念碑」

一八七三（明治六）年夏、中国→豪州間のドイツの貿易船が
台風で宮古島南岸、宮国沖合の干瀬に座礁したさい風雨の中救
助し、三十四日間介護ののち無事帰国させた。三年後の一八七
六年の三月、ドイツ国皇帝が漲水港（現平良港）近い小丘に石
碑を建立し、感謝の意を表した。一般に「博愛記念碑」とよば
れている。

一九三六（昭和十一）年十一月、建碑（救助ではない）六〇
周年記念事業は、日独両国代表参列のもと、三日間にわたって
盛大に催された。主催は宮古郡教育会だが、後援は、沖縄県、
外務省、日独協会、ドイツ文化協会、ドイツ文化研究所、朝日
新聞、毎日新聞など。祝辞は、総理大臣はじめ、内務、外務、
文部、海軍各大臣が寄せ、ラジオ、全国紙が日本とナチスドイ
ツとの友好親善を大きく報じている。その旬日後、日独防共協
定、ついで日独伊三国軍事同盟、第二次世界大戦へと突き進ん
でいる。

◇「久松五勇士」

一九〇四（明治三十七）～〇五年の日露戦争は、日露両国が朝鮮・満州（現中国東北三省）の権益をめぐる戦争であった。ロシアの大艦隊が決戦場となる日本海へと向かっているとの通報を受けたものの、通信手段のない宮古郡当局は、久貝・松原の五人の若ものに百三十キ余の大海をサバニで渡り、石垣島の電信局から通報させた。しかし「ロシア艦隊発見」はすでに哨艦信濃丸から打電されていて、結果として五人の命がけの苦勞は奏効していない。

四年後の一九〇九年十二月の県議会で、宮古選出議員は、一九〇三年五月、軍艦東雲号が八重干瀬で遭難したとき池間村民を小舟で石垣島へ派遣し打電させた。日露戦争でも同様小船で石垣島から急報させたが、宮古に電信局があったなら海戦は違った展開をみせたであろう趣旨の発言をしている。

一九一八（大正七）年五月、「海軍記念日」（五・二七）に宮古出身の佐久田昌教沖縄県師範学校教諭は久松の五人の若もの行為について生徒に講話している。感激した同僚の稲垣国三郎教諭は同年冬、宮古出張のさい、直接聞き取りなどして、周知の「遅かりし一時間」にまとめた。一九二九（昭和四）年発行の五十嵐力早稲田大学教授編さん「純正国語読本」に掲載され、全国の中等学校で使用されている。

翌三〇年、五人には、女子学習院の伴しげ子教授から扇子、県知事から金一封、三五年には海軍大臣表彰、はては「肉弾三勇士」になぞらえて「久松五勇士」と称され、演劇、映画、レ

コード、浪曲、琵琶歌などで全国に知られるようになった。

◇再び利用されぬよう…

時まさに「十五年戦争」、五人の心のうちはどうあれ、国威発揚・戦意高揚に利用されたのである。

尖閣諸島や北朝鮮、下地島空港等に関連して、さまざまな文化的装いのもと、自衛隊配備等も取り沙汰されている。「人命救助」「命がけの力漕」など、本来「美談」である。それゆえかえって利用されやすいのであり、軽視してはならない。

『宮古毎日新聞』二〇一一・六・九

4、「博愛」とドイツ文化村

一八七三（明治六）年七月、ドイツの商船ロベルトソン号は中国・福州から豪州・アデレードにむかう途中、台風にあつて遭難、乗組員十人中生存者八人は宮古の人びとに救助された。三十四日間にあつた介護ののち、官船を与えられて基隆、福州をへて無事帰国した。ドイツ各紙に報じられたこともあつて、時の皇帝ウイルヘルム一世の知るところとなる。三年後、一八七六（明治九）年三月、ドイツ政府は明治政府の許可を得て軍艦を派遣、平良の親越に記念碑を建立、感謝の意を表した。一九五六（昭和三二）年二月、県指定史跡に指定された所謂（いわゆる）「ドイツ皇帝博愛記念碑」建立の概要である。

今年は救助から百十四年、建碑からは百十一年になる。百余年をへたいま、救助の地である旧宮国村所在の上野村では、「ドイツ文化村構想」を発表、博愛記念館、ドイツ南島文化研究所、宮古民族博物館、熱帯果樹センター、人工ビーチ、キャンプ場など、多彩な企画で話題をよんでいる。宮古郡民の「博愛の心」を長く子々孫々に伝え、ひいてはムラの活性化へつなげていくというものである。

ところで「宮古島在番記」によれば、十七世紀末から十九世紀末にかけての宮古は、おびただしい数の船舶の遭難救助、漂着、寄港の記録をとどめている。琉球内の船が五十一回、大和船（道之島含む）二十四回、中国船七回、朝鮮船二回、欧米船二十一回、その他一回、合計百六回にのぼる。薩摩藩を介しての幕藩体制下、首里王府の政策でもあったろう、そのほとんどが手厚い介護をうけ、宰領役人をつけて那覇をへて送り届けられている。

一七四五（乾隆十）年一月、秋田・能代の門田与次エ門ら六人は伊良部島で救助されたとき、「われわれを殺すか」と聞いている。東北地方の悲しい当時の世相を反映していることばだという。伊良部の人びとは「殺さぬ。船を修理したうえ、大和へ送ってやる」と答えている。彼らがぶじに故郷に帰れたのはいうまでもない。また、一七九七（嘉慶二）年五月、池間島近くで座礁した英国・プロヴィデンス号のブロートン船長らは、薪（まき）や穀物、鶏、豚、大量の水を小舟で送り届けながら、「対価

を要求するでもなく、そうしたそぶりをも見せなかった」宮古の人びとのことを書き残している。

このように私どもの祖先はつねに遭難者、寄港者に対して「親切で礼儀正しく、必要なものは与え、何の代償も請求しなかったのである。直接救助に当たったのが人頭税制下の民衆であったことを想起すれば、なおさら思い半ばに過ぎるものがある。ロベルトソン号と同様である。皇帝の指示で記念碑が送られた一事を別にすれば。

このころのドイツは第二帝国が成立して間もなく、鉄血宰相ビスマルク活躍の時期である。記念碑の除幕式を皇帝ウイヘルム一世の誕生日に合わせるなど、ドイツ帝国の威信を内外にアピールするためのデモンストレーション、さらにはアジアへの一つの足がかりを築こうとしたとの見解もある。

一九三三（昭和八）年、宮古郡教育部会は、文部省が広く全国に求めた国定教科書用教材に、この事件を「博愛」と題してまとめ、一等に当選した。時あたかもロベルトソン号救助六十年である。しかしこの時は何事もなく終わっている。それから三年後の昭和十一年十一月建碑六十周年記念式典が外務省等各団体の後援、文部・陸海軍各省等の協賛のもとに盛大に挙行された。旬日後、日本はナチス・ドイツと防共協定を締結、翌年イタリヤも参加、ここに日独伊三国軍事同盟が成立、日本は連合国を相手に世界戦争へと突入していった。

他方、教育部会が応募した「博愛」は、同十二年発行の国定

教科書「修身」に掲載、全国の児童に供されたのである。

すべての遭難者にわけへだてなく接した祖先の「博愛の心」をそこなうことなく、国策によって建碑にこめられたさまざまな意図やその後の悪しき利用をもきちんと整理し、二度と「博愛の心」をゆがめたり、傷つけたりすることがないような、「ドイツ文化村構想」でありたいと願うものである。

『琉球新報』一九八七・七・一二

5、地域史を記録する

順調であれば一九三四（昭和九）年四月二日―三五年四月一日生まれは、小学校を出ていない唯一の世代である。

一九四一（昭和十六）年四月、政府は一八八六（明治十九）年の「小学校令」に始まる学制を全国的に改め、尋常高等小学校（尋常科六年・高等科二年）を国民学校に、尋常科は初等科と改称した。国民学校は六年間存続して、敗戦後の一九四七年四月、「六・三制」の施行で現在の小学校に生まれ変わった。このように六年間のみ存在した国民学校の六年間の全課程を卒えたのは、一九四一年入学組のみである。その後の生き方を規定した原点だと考えている。

小学校令の第一条は、「小学校ハ児童ノ身体ノ発達ニ留意シ、道徳教育オヨビ国民教育ノ基礎ナラビソノ生活ニ必須ナル普

通ノ知識技能ヲ授ケルヲ以テ本旨トス」であるが、国民学校令第一条は、「国民学校ハ皇国ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ、国民ノ基礎的練成ヲ成スヲ目的トス」となっている。ここに明示された「皇国ノ道ニ則リ」とは、一八九〇年十月、明治天皇が発布した「教育勅語」の精神を意味し、「一旦緩急アレバ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スベシ」とうたわれた世界である。換言すれば「皇国ノ道」とは、国民はいざというときには、天皇のために命を捨てよ、ということであろう。

教育勅語にさきだつ前年の、一八八九年二月に発布された「大日本帝国憲法」第一条は、「大日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス」とある。第三条は、「天皇ハ神聖ニシテ侵スベカラズ」である。教育勅語はこの憲法に基づくものであり、国民学校令はそれを一層具体化したものといえる。

教科書も大きく変わった。一年生の「ヨミカタ（国語）」は、従来の「サイタ サイタ サクラガ サイタ」から、「アカイ アカイ アサヒ アサヒ」、音楽は「ドレミファソラシド」ではなく、「ハニホヘトイロハ」から始まった。これは敵性語の排除であるばかりでなく、幼少から敵機の爆音を聞きわけける音感訓練としての変化であった、と言われている。その年の十二月、日本は泥沼化した中国大陸での侵略戦争に引きつづいて太平洋戦争に突入した。二年生では「日本よい国、きよい国、世界にひとつの神の国。日本よい国、強い国。世界に輝くえらい国」を学び、三年生からは町内会・部落会ごとに「大日本青少年団」

の地域組織に編成され、分列行進など軍隊調の訓練が日常化していく。

「紀元節」「天長節」「明治節」「〇〇記念日」などの儀式がひんばんに挙行される。そのつど「日の丸」掲揚、「君が代」斉唱があつて、礼装した校長が厳かに教育勅語を「奉読」する。その間中、最敬礼の姿勢で、咳払いはおろか鼻水をすすすることも許されない。上級に進むにつれて、教育勅語の暗誦が強制され、さらには「神武」以来百二十四代にわたるといふ歴代天皇まで暗唱させられた。うまく暗唱できずにビンタを張られ、廊下に立たされた級友も多い。

一九四四（昭和十九）年、四年生の夏、学童疎開のよびかけがあつた。戦火を避けて安全な所で教育をつづけるのだという。三年生以上が対象である。このころ宮古でも三つの軍用飛行場の設営が始まり、三万近い陸海軍将兵が展開しつゝあつた。学校などの公共施設は兵舎や野戦病院に接収され、御嶽などでの分散授業が取りざたされていた。しかし大方の親は子どもだけの疎開を不安がり、最終的に学童疎開に応じたのは、宮古では平良第一、平良第二（現北小）、下地の三校のみ。一部に九州への縁故疎開もあつたが、大半は台湾へ、青壮年を除く老幼婦女子だけの一般疎開であつた。

わが家は学童疎開の行く先が宮崎なら、叔母の出身県鹿児島がよいというので縁故疎開に切り替えられた。八月二十六日漲水港（現平良港）から軍の上陸用舟艇で沖に停泊する大型輸送

船に乗り込み、一週間余後出発した。那覇でも一週間余旅館に分宿、沖縄本島からの学童疎開組も加わつて船団が編成され、さらに本部半島の沖で一週間余の停泊である。

このころ沖縄―九州間は日本に制海権・制空権ともになく、米軍の潜水艦が跳梁しているというのが、大人たちのひそかな話題である。全員救命胴衣を着装、大嵐について出航した。七島灘では爆雷であろうか、夜通し耳をつんざく轟音で一睡もできぬまま、九月二十一日鹿児島湾に入った。翌二十二日下船、旅館に分宿して宮崎組と別れたが、ここで先に那覇を出発した疎開船が米軍の魚雷で沈没されたことを知つた。対馬丸であつたらうか。

転校した国民学校の正門右脇（東側）には天皇・皇后の写真「御真影」を納めた鉄筋コンクリートの奉安殿があつて、登下校時には最敬礼をさせられた。ここでも教育勅語の暗唱がまづいと怒声がとび、廊下に立たされる。音楽はほとんど「軍歌」、体育は素足で霜を踏みしめ、「立木打ち」がくり返された。五年生では「国史」上で、天皇統治を正当化する「神話」を歴史として学んだ。

こうして「大きくなつたら兵隊さんになります」と答える、「軍国少年」に育つていった。

一九四五（昭和二十）年四月、五年生になった。米軍の猛爆は連日のように続く。さらに山奥へ疎開した数日後の八月十一

日、留守宅のある人口二万人足らずのまちは大方灰尽に帰した。四日後敗戦である。食糧や衣類は早くから減配・欠配続きで、人びとは着たきりの、栄養失調で、シラミとノミのえじきにさられていた。四六時中目にみえるものすべてが食べ物にみえる。「飢えの世代」とよぶゆえんである。

学校も全焼し、戦後焼け跡での再開であるが、しばらくすると教科書の墨塗りが始まった。軍国主義・超国家主義とみなされる記述はすべて教師の指示にしたがって、墨で塗りつぶす。一九四七年三月、国民学校最後の卒業式となったが、五月には新制中学が開校して全員入学、出来たばかりの「日本国憲法」を学んだ。世の中が百八十度転回し始めていることを実感させられた。文部省が配布した「あたらしい憲法のはなし」はおおよそ次のように記している。

「これまでであった憲法は明治二十二年にできたもので、これは明治天皇がおつくりになって、国民に与えられたものです。しかし、こんどのあたらしい憲法は、日本国民がじぶんでつくったもので、日本国民ぜんたいの意見で、自由につくられたものであります。この国民ぜんたいの意見を知るために、昭和二十一年四月十日に総選挙が行われ、あたらしい国民の代表がえらばれて、その人々がこの憲法をつくったのです。それで、あたらしい憲法は、国民ぜんたいでつくったということになるのです。」

当時の文部省は、このように現行「日本国憲法」が、総選挙によって選出された国民の代表によって制定されており、国民によってつくられたのだ、という認識で児童に教えたのである。さらに次のように記す。

「こんどの憲法では、日本の国が、けっして二度と戦争をしないように、二つのことをきめました。その一つは、兵隊も軍艦も飛行場も、およそ戦争をするためのものは、いっさいもないということです。これからさき日本には、陸軍も海軍も空軍もないのです。これを戦力の放棄といいます。『放棄』『すてしまふ』ということです。しかしみなさんは、けっして心ぼそく思うことはありません。日本は正しいことを、ほかの国よりさきに行つたのです。世の中に正しいことぐらい強いものはありません」

だが、戦後日本の民主化をはかるかにみえた占領軍は、ソ連や中国、朝鮮半島などの情勢にからめて、次第に政策を転換した。朝鮮戦争が始まって間もない五〇年八月、警察予備隊の創設、五二年十月、保安隊、五四年七月、自衛隊へと発展させた。その間、対日講和条約を締結、発効（五二年四月）させ、沖縄は引きつづき米軍の全面占領下におくとも、憲法の空洞化を進め、今日の「改憲」「創憲」への道を開いてきた。

宮古の戦後は当然のことながら、国・県にかかわりなく独自の出版である。四五年十二月『みやこ新報』創刊、四六年三月

の郡民大会では六人の弁士がそれぞれ、「官公吏・議員を公選せよ」「民主主義政治の確立」「労働者団結せよ」「農民組合の結成」「不正拡大を是正せよ」「郡政の実権は郡民にあり」を発表、決議文を米軍任命の支庁長に手交している。九月には教員組合も結成され、「教員の経済的、社会的並に政治的地位の向上」「教育行政の民主化」など六項目の実現に向けて活動を始めた。『文化創造』『文芸旬刊』の小紙誌も創刊され、「民衆文化の巨火」「文化島建設」等が唱導された。こうした民間の動向を反映して、宮古民政府は四七年八月「新宮古建設の歌」を公募、十一月には宮古文化連盟や宮古文化史さん委員会を発足させている。

一九五二年四月「琉球政府」の発足で、民衆運動も大方那覇発信の全体的な歩みの一環となるが、地域に根ざす運動が絶えたわけではない。顕著なのは「糖業合理化」製糖工場合併反対、下地島飛行場建設反対運動などである。下地島問題は、いわゆる「屋良覚書」の背景をなすものである。

国民学校で神話を歴史として、ついで「くにのあゆみ」、中学・高校で日本史と世界史を学んだ以外に、歴史を専門に学んだことはない。その後は興味と関心のおもむくままに読み、尋ね、歩いてきたが、請われて自治体の修史事業にかかわるようになって、宮古史を構成する島々の歴史、琉球史の中の宮古、日本史に占める琉球、東アジアにおける琉球史の世界が一層鮮明に見えてきた。何事であれ、宮古と沖縄、沖縄と本土という二項

対立ではなく、地域を見ずえるところから、広く琉球・沖縄、日本、東アジアが見える、と考えている。

国政の中核とそれに追隨する人々が公然と戦前回帰をはかるうとする今、国民学校で育ち、日本国憲法を最初に学んだ「飢えの世代」として、これまで以上に足もと―地域に根ざすことの重要性を己に言い聞かせている。

〔沖縄タイムス〕二〇〇五・二・一、二

市民各層の協力を得て

十二年振り、南九州の疎開先から帰郷した宮古での社会人としての出発は、一九五七（昭和三十二）年十月であった。新聞の求人広告を見て履歴書を出し、作文だけで採用された。宮古毎日新聞社の編集局である。二年後、いずれも請われるままに三つの職場に転じた。日刊南沖縄社四年半、宮古教職員会（現沖教組宮古支部）十年、旧平良市職員として二十一年。地元二紙での六年半は毎日早朝から官公庁と大小各種職場を訪問して人に会い、資料に当たって記事を書く。宮古教職員会では機関紙中心の情宣活動で、ここでも毎日会員の勤務する小・中・高校など、教育機関を歴訪して情報を収集し、隔日刊の機関紙に反映させる、あるいは各種集会の資料づくりに当たっていた。

旧平良市職員としては教育委員会指導課が振り出しで、文化

財保護・「平良市史」編さん・市民総合文化祭などの始まりに関与させてもらった。その後いくつかの課を移動したが、企画室・社会教育課・総合博物館など、主として文化行政部門であった。四十年近い社会人としてのどの部署も、全職員はもとより市民各層の直接参画・協力なしでは成立しない業務ばかりであった。そのため請われればいつでもあれ公衆を前にして話すこと、各種紙誌への執筆もよほどの支障がない限り、公的私的を問わずべて対応した。本稿はそのなかの「回想の戦中平良（Ⅱ宮古）のまちと周縁」にふさわしいと思えるもののいくつかをまとめたものである。

表題は便宜上短く省略したもの以外はほとんど内容も発表当時のままだが、四点だけは内容に即して表題を次のように改めた。

「皇国臣民の道」（仲元銀太郎先生誕生百年）

「新聞一家」（宮里光雄氏（瀨名波清）への回想）

「漲水港と周辺景観」（「漲水周辺の歴史的景観を考える」）

「教科書にのった宮古」（「近代宮古の歴史に学ぶ」）